

神ノ前窯跡

福岡県筑紫郡太宰府町吉松所在窯跡の調査

太宰府町文化財調査報告書 第2集

1979

太宰府町教育委員会

神ノ前窯跡

福岡県筑紫郡太宰府町吉松所在窯跡の調査

昭和54年 3 月31日

太 宰 府 町 教 育 委 員 会

序

近年、全国的な傾向としての土地開発現象は、本町においても顕著であり、そこには、必然的に文化財保護の問題が緊要な課題として提起されております。これらの状況に対応して、開発と保存の調整を図りつつ、止むをえず、消滅せざるをえない遺跡については、事前の調査を十分に行い、後世の人々に郷土の歴史を伝えていく使命を、文化財行政は担っていると言えます。

今回 調査した神ノ前遺跡は、水城青葉台第二期造成工事に伴って発見された窯跡で、発掘された遺物は、大宰府政庁以前の大宰府を究明する上で誠に重要なものであると考えます。

本報告が研究資料の一つとして御活用いただければ幸いに存じます。

なお、調査に際して、指導助言をいただいた福岡県教育庁文化課、九州歴史資料館の担当者を始め、作業に従事された地元の皆さん、更に、発掘調査費を全額負担された、原因者の栄泉興産株式会社並に株式会社いそのさわの方々の多大のご協力と文化財に対する深い御理解に深甚の謝意を表します。

昭和54年 3 月31日

大宰府町教育委員会

教育長 陶 山 直次郎

例 言

- 1 この報告書は筑紫郡太宰府町大字吉松所在窯跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査及び遺物整理作業は栄泉興産株式会社の受託事業として太宰府町教育委員会が実施し、福岡県教育委員会の援助を受けた。
- 3 発掘調査の実施に当り、株式会社竹中土木の援助を受けた。
- 4 本書の執筆は次の通りである。

I	酒 井 仁 夫	
II	酒 井 仁 夫	
III - A, B-1	酒 井 仁 夫	
III - B-2	石 松 好 雄・高 橋	章
IV	酒 井 仁 夫	
- 5 本報告書は酒井が編集した。

本文目次

I	位置と環境	1
II	調査の経過	4
III	調査の内容	5
A	遺構	5
B	遺物	9
1	須恵器	9
2	瓦	36
IV	まとめ	39

図版目次

図版 1 (1)	窯跡遺景
(2)	調査前の1号窯
図版 2 (右)	1号窯各床面断面
(左)	1号窯全景
図版 3 (1)	調査前の2号窯
(2)	天井部残存時の2号窯全景
図版 4 (1)	2号窯と灰原全景
(2)	2号窯全景
図版 5	1号窯出土須恵器 ①
図版 6	1号窯出土須恵器 ②
図版 7	1号窯出土須恵器 ③
図版 8	1号窯出土須恵器 ④
図版 9	2号窯出土須恵器 ①
図版 10	2号窯出土須恵器 ②
図版 11	2号窯出土須恵器 ③
図版 12	2号窯出土須恵器 ④
図版 13	2号窯出土須恵器 ⑤
図版 14	2号窯出土須恵器 ⑥
図版 15	2号窯出土須恵器 ⑦
図版 16	2号窯出土軒丸瓦
図版 17	2号窯出土軒丸瓦 凹・凸・叩き目部分

- 図版18 2号窯出土平瓦
- 図版19(上) 粘土紐痕跡とナデおよびハケ目調整(平瓦)
(下) ナデおよびヘラケズリ調整(平瓦)
- 図版20(上) 丸瓦
(下) 須恵器甕の凸凹面の叩きおよびナデ調整

挿図目次

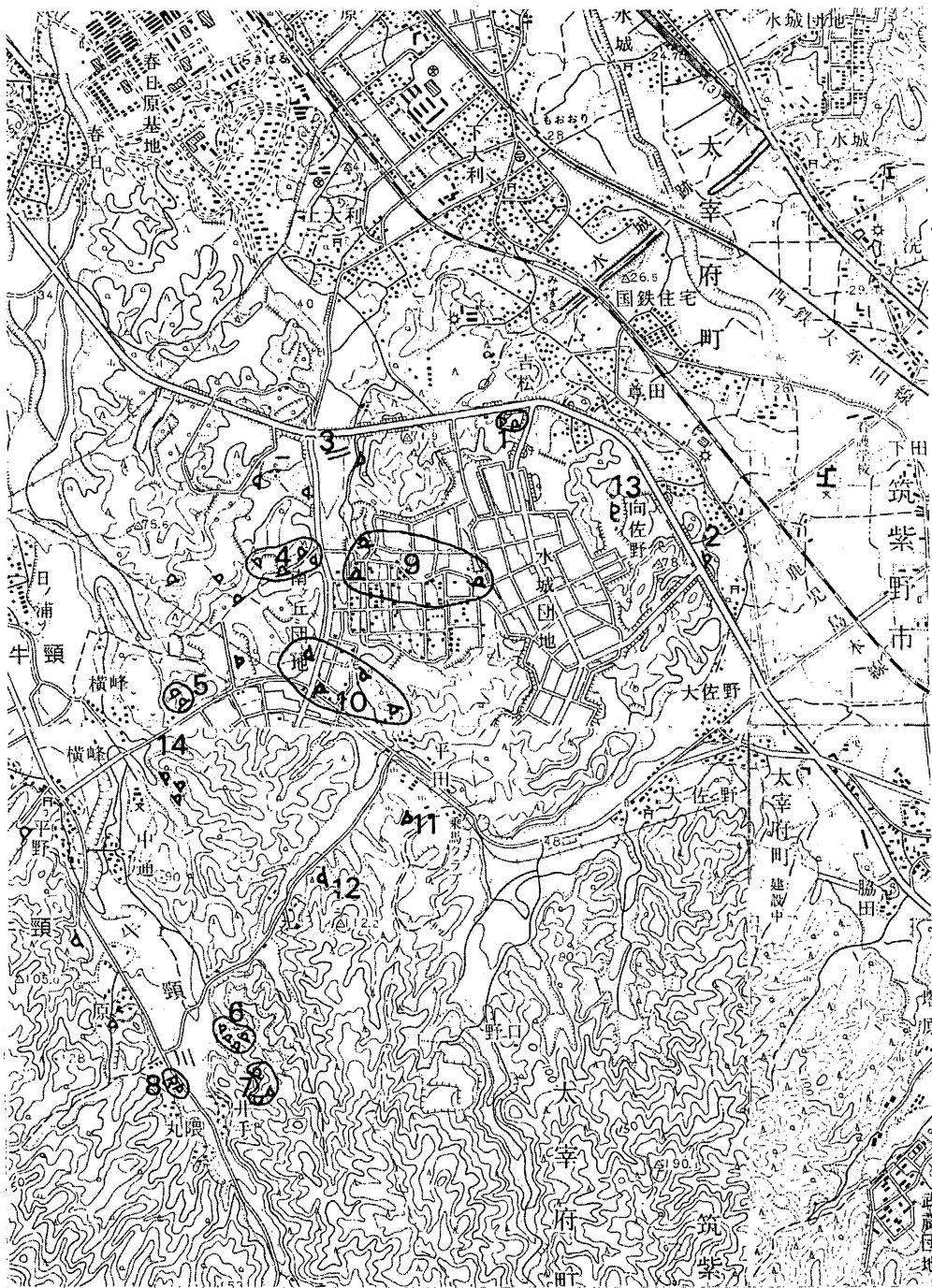
第1図	周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000).....	2
第2図	1・2号窯跡地形実測図 (縮尺 1/200).....	3
第3図	1号窯跡実測図 (縮尺 1/60).....	6
第4図	2号窯跡実測図 (縮尺 1/60).....	8
第5図	2号窯跡灰原断面実測図 (縮尺 1/60).....	9
第6図	階段状遺構実測図 (縮尺 1/60).....	10
第7図	1号窯内各層出土須恵器実測図 (縮尺 1/3).....	11
第8図	1号窯灰原出土須恵器実測図① (縮尺 1/3).....	13
第9図	1号窯灰原出土須恵器実測図② (縮尺 1/3).....	14
第10図	2号窯内各層出土須恵器実測図 (縮尺 1/3).....	16
第11図	2号窯灰原出土須恵器実測図① (縮尺 1/3).....	17
第12図	2号窯灰原出土須恵器実測図② (縮尺 1/3).....	19
第13図	2号窯灰原出土須恵器実測図③ (縮尺 1/3).....	20
第14図	2号窯灰原出土須恵器実測図④ (縮尺 1/3).....	21
第15図	2号窯出土須恵器実測図⑤ (縮尺 1/4).....	22
第16図	1号窯出土須恵器ヘラ記号拓影 (縮尺 1/3).....	23
第17図	2号窯出土須恵器ヘラ記号拓影 (縮尺 1/3).....	24
第18図	1号窯出土須恵器外面叩き拓影 (縮尺 1/2).....	25
第19図	2号窯出土須恵器外面叩き拓影 (縮尺 1/2).....	25
第20図	2号窯跡出土軒丸瓦 (縮尺 1/3).....	折込み
第21図	2号窯跡出土平瓦実測図・拓影 (縮尺 1/3).....	折込み
第22図	平瓦細部拓影 (縮尺 1/2).....	38

I 位置と環境 (第1・2図, 図版1)

福岡平野南部の牛頸山（標高 448m）は背振山地の東北方にあり、御笠川の支流牛頸川その他の水系によって開析されて狭長な丘陵地を形成している。現在の行政区画の大野城市牛頸から春日市、太宰府町の一部にまたがって牛頸窯跡群が存在する。神ノ前窯跡は牛頸窯跡群の東北端に位置する。

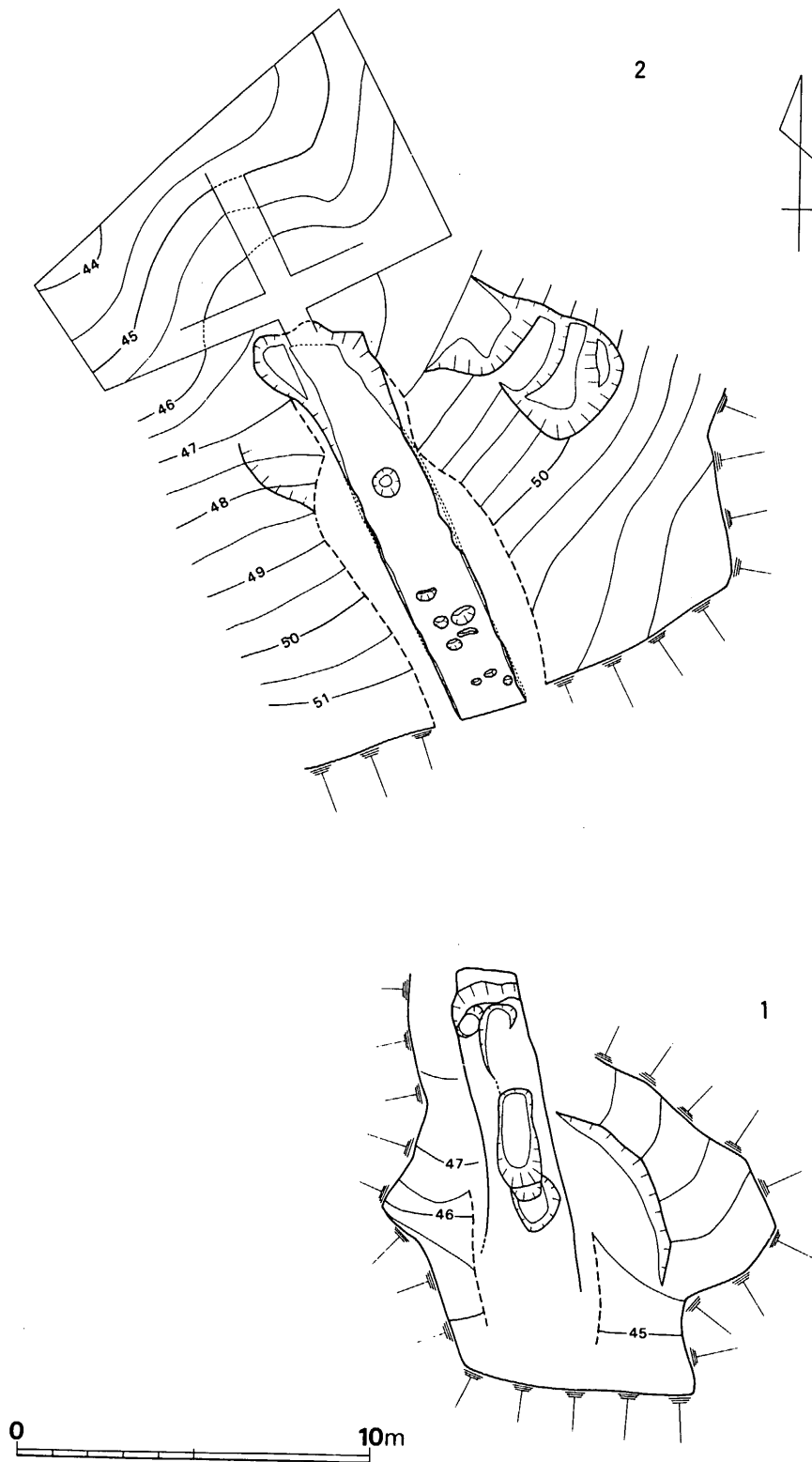
牛頸窯跡群はこれまで小田富士雄氏、国士舘大学、立正大学、福岡県教育委員会によって調査されてきており、刊行された報告書としては次の書がある。

1. 福岡県教育委員会『野添・大浦窯跡群』「福岡県文化財調査報告書」第43集 1970
2. 坂詰秀一編「筑前平田窯跡」雄山閣 1974
3. 福岡県教育委員会『長浦窯跡』『向佐野窯跡』「九州縦貫自動車道路関係埋蔵文化財調査報告書」第Ⅵ集 1975
4. 横田賢次郎、川述昭人、酒井仁夫「福岡県大野城市牛頸における奈良時代窯跡」九州考古学49・50 1974
5. 大野城市教育委員会「大野城市文化財分布地図」
6. 大野町教育委員会「大野町の文化財」第2集 1971
7. 小田浦窯跡発掘調査団『小田浦窯跡の調査』「大野城市の文化財」第9集 1977



第1図 周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

- | | | | |
|---------|----------|----------|----------|
| 1 神ノ前窯跡 | 2 向佐野窯跡 | 3 小水城 | 4 野添窯跡 |
| 5 平田窯跡 | 6 ハセムシ窯跡 | 7 井手窯跡 | 8 原窯跡 |
| 9 大浦窯跡 | 10 平田窯跡 | 11 平田南窯跡 | 12 上平田窯跡 |
| 13 長浦窯跡 | 14 東浦窯跡 | | |



第2図 1・2号窯跡地形実測図 (縮尺 1/200)

Ⅱ 調査の経過

1978年9月、栄泉興産株式会社より太宰府町教育委員会社会教育課及び福岡県教育委員会文化課に対して、太宰府町大字吉松の宅地造成予定地内における埋蔵文化財の有無についての問い合わせがあり、文化課は9月に窯跡2基がある旨回答した。その結果栄泉興産株式会社の委託事業として太宰府町教育委員会が調査を実施することとなり、同年10月13日より11月4日まで発掘調査し、その後12月1日より1979年3月4日まで遺物整理作業を実施した。

調査の関係者は次の通りである。

総括	太宰府町教育委員会	教 育 長	陶 山 直次郎
	同	社会教育課長	木 本 茂
		社会教育課文化財係長	鬼 木 富士夫
事務・会計	同	社会教育課文化財係	野津原 弘 明
発掘調査	福岡県教育委員会	文化課主任技師	酒 井 仁 夫
		同	浜 田 信 也
		同	川 述 昭 人
		文化課技師	佐々木 隆 彦
遺物整理	福岡県教育委員会		岩 瀬 正 信

Ⅲ 調査の内容

遺跡は国指定史跡水城堤が取り付く丘陵の南北両斜面にあり、煙出し部は現在失われてはいませんが、相向い合う2基の窯跡が検出された。

A 遺 構

1 1号窯 (第3図)

S13°Eの焚口方向をもつ地下式窯である。焼成部上半と煙道部は削平されており、残存長7.6mである。3回にわたる床の作り替えがあり、各回ごとに数度の小修理のあとがみられる。

窯体の構造

焚口 (A—B間)

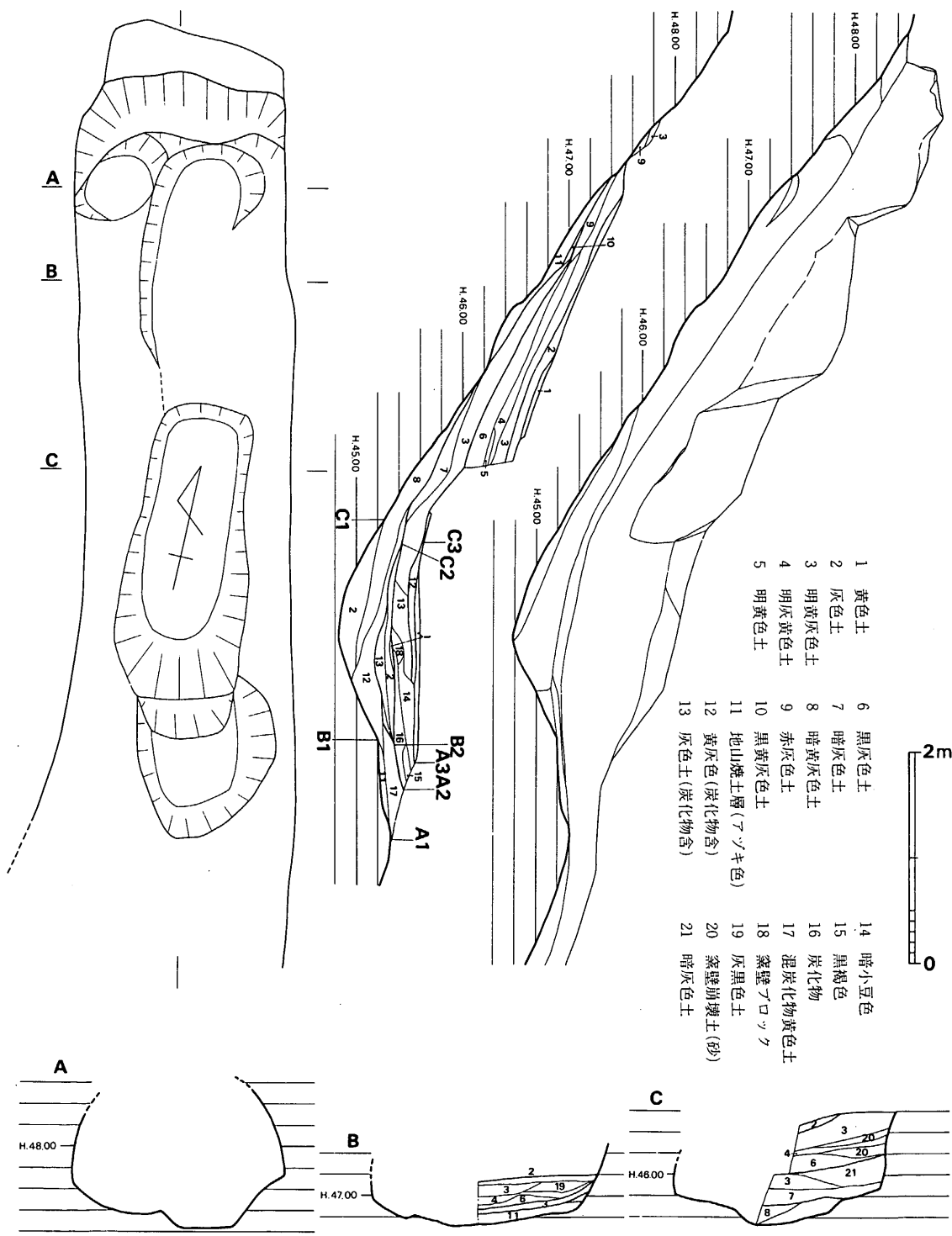
第1次床面は長さ95cmあり、窯体内へ向けて僅かに傾斜している。奥巾 2.2m、前巾 2.6mで、前広がりを開いている。床面中央に巾80cmの楕円形ピットがある。直立する壁はよく焼き締まっている。第2次床面は約15cm嵩上げされ、長さ45cm残している。床面はやはり燃焼部へ向けて僅かに傾斜している。第3次床はさらに25cm嵩上げされている。床面は水平となり、燃焼部との区別がつかない。

燃焼部 (B—C間)

第1次床面では焚口から90cmの間約20°の傾斜で下がっており、その後長さ 1.1mの間15°~30°の傾斜で上っている。この縦断面摺鉢状の中に砂を含んだ灰色土(2)が堆積しており、この範囲までが燃焼部と思われる。巾は中央部で 1.9mであり、窯体の中で最も狭く、焼成部へと広がっている。第2次床面での燃焼部は長さ 1.9mあり、中央部で35cm嵩上げされている。灰色土(2)と炭化物を含む灰色土(13)が堆積する範囲と考えられる。最初中窪みした床面だったものが、水平に埋った時点で操業を止めている。第3次床は長さ 2.1m残しており、中央部で20cm嵩上げされている。第2次床と同様、堆積物で水平に埋った時点で操業を終えている。第4次床は不明。

焼成部

第1次床面は33°の傾斜で上り、長さ 4.6mを残している。巾は燃焼部から 3.1m伸びたところが最も狭く、その先僅かに狭くなる。床面は荒れている。第2次床は 1.6m伸びた個所で第1次床面に接する。それだけ傾斜角度は緩くなり、30°となる。第3次床面では27°、第4次床面で20°となる。各次の床面とも硬く焼き締まっている。その間には窯壁片を多く含んでいる。特に20~30cm大のスサ入りの土塊があり、修理の多かった事を思わせる。



第3図 1号窯跡実測図(縮尺1/60)

灰原・物原

燃焼部から掻出された炭化層は南に広がり、約4m伸びて崖で切られていた。深さ約1mあり、多量の須恵器を含んでいた。また灰原の東側には物原が広がっていたが、ここも東側の崖で約2m伸びて切られていた。

2 2号窯(第4・5図)

N26°Wに焚口方向をもつ地下式窯である。焼成部上半と煙道部は削平されており、残存長12.0mで、前庭部、焚口、燃焼部、焼成部より成る。

前庭部、焚口は1回、燃焼部は2回、焼成部は1回修理されているが、各床間に窯壁片を含むことはなく、1号窯に比べて操業期間が短かったと思われる。

前庭部

窯尻は右扁して広がり、周囲に高まっている。壁は低くなり、焼けていない。中央部で床面から90cmの厚さの炭灰層が堆積し、北側の上端に接して、灰原へと伸びている。

窯体の構造

焚口(A-B間)

前庭部に続き、やや中ぶくらみだが垂直に立つ壁が固く焼締っている範囲が焚口と考えられる。第1次床は長さ80cmあり、床面は水平で燃焼部側に広がっている。奥巾2.0m。第2・3次床面は同一で第1次床を5cm嵩上げしている。床面はやはり水平である。

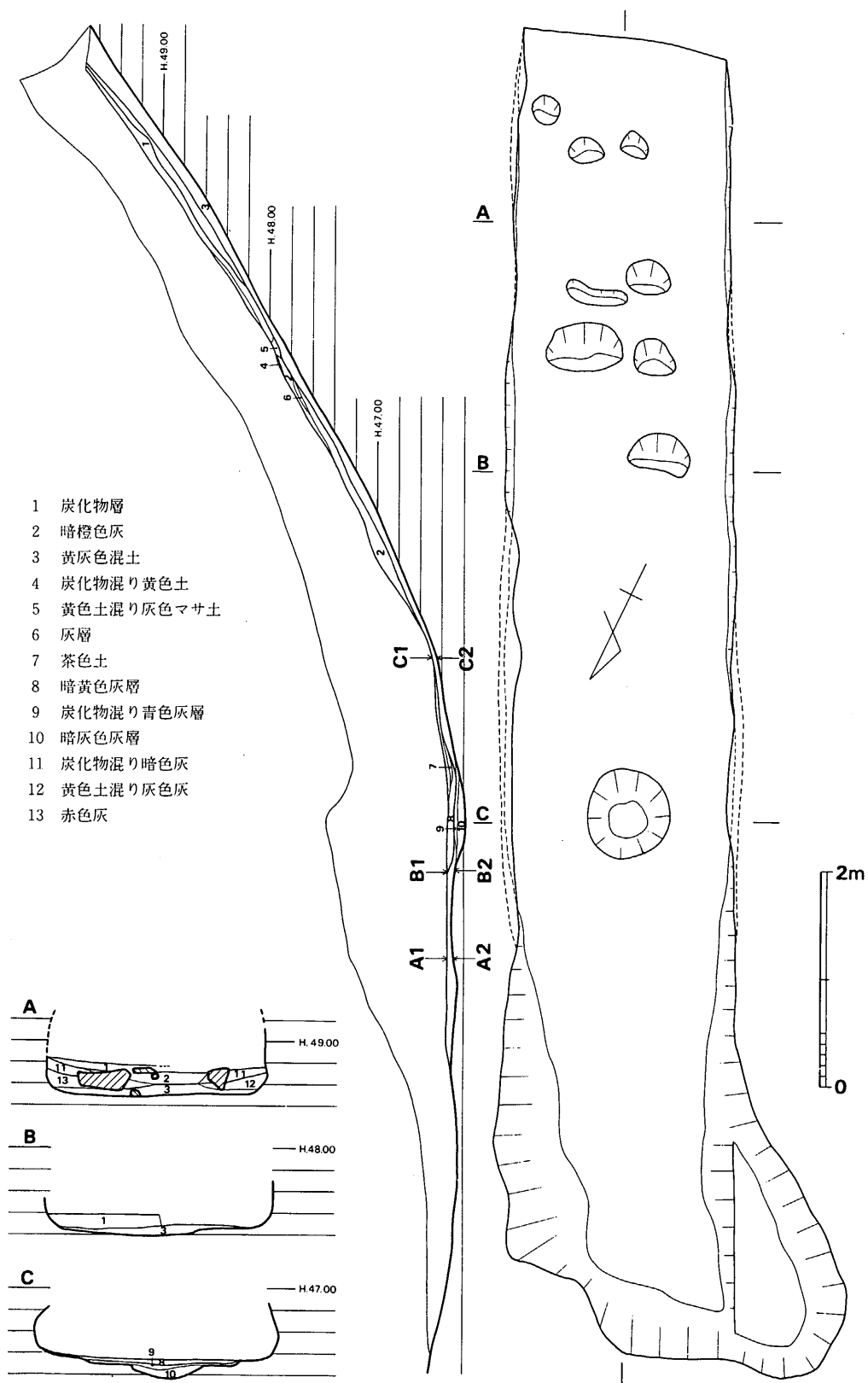
燃焼部(B-C間)

床面中央の円形摺鉢状ピットを挟み、焼成部との傾斜変換点までが燃焼部と考えられる。第1次床では円形ピット底から焼成部側に若干上り気味となる。硬い炭化物混りの灰層が5~10cm堆積した上に第2次床が作られている。床面は浅い中窪みとなっているが、その上の第3次床では水平になっている。壁は中ぶくらみが大きい。

調査中約1.5mの高さの天井部が残っていたが、壁体の亀裂が多く、危険なため取り壊した。

焼成部

傾斜変換点から5.8mの長さを残していた。傾斜角30°である。第1次床では楕円形や円形の浅いピットがあり、置き段をしつらえている。また、第1次の床面で小石があるが、第2・3次床面となると置き台としての表面平坦な石が床に埋め込まれている。壁は垂直に立ち、天井はドームをなす。



第4図 2号窯跡実測図 (縮尺 1/60)

灰 原

前庭部北端の高まりを越え、西及び北側へかけて広がり、北側は12m伸びて崖で切られている。

3 階段状遺構 (第6図)

2号窯の東側に2m離れてN60°Wの略北西に開く階段状遺構が検出された。長さ5.2m、上部巾3.3mで、床面3段(部分的に4段)に平坦に近い面を作っている。壁及び床は何ら加熱された形跡はない。埋土中から少量の須恵器と瓦片が出土した。

B 遺 物

検出した遺物は須恵器と瓦である。総量はドンゴロス100袋程度である。以下須恵器と瓦について記述する。

1 須恵器

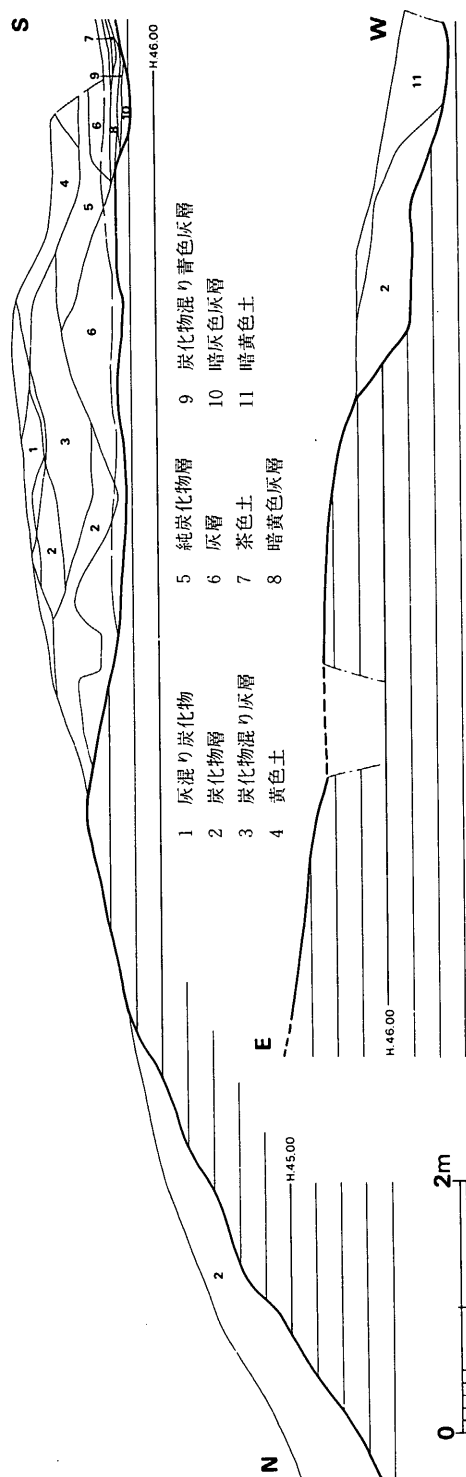
窯内遺物の床面毎の形式差について把握に努めたが、十分な成果は得られなかった。

蓋杯・高杯を中心として4類に区分し、各々A・B・C・D類とした。筑前における須恵器の編年は小田富士雄氏の考察を鰭矢としており、^(註1)それを礎にして作成した御笠川東岸地域における須恵器の相対年代と絶対年代についての拙稿^(註2)を今回の分類基礎とする。

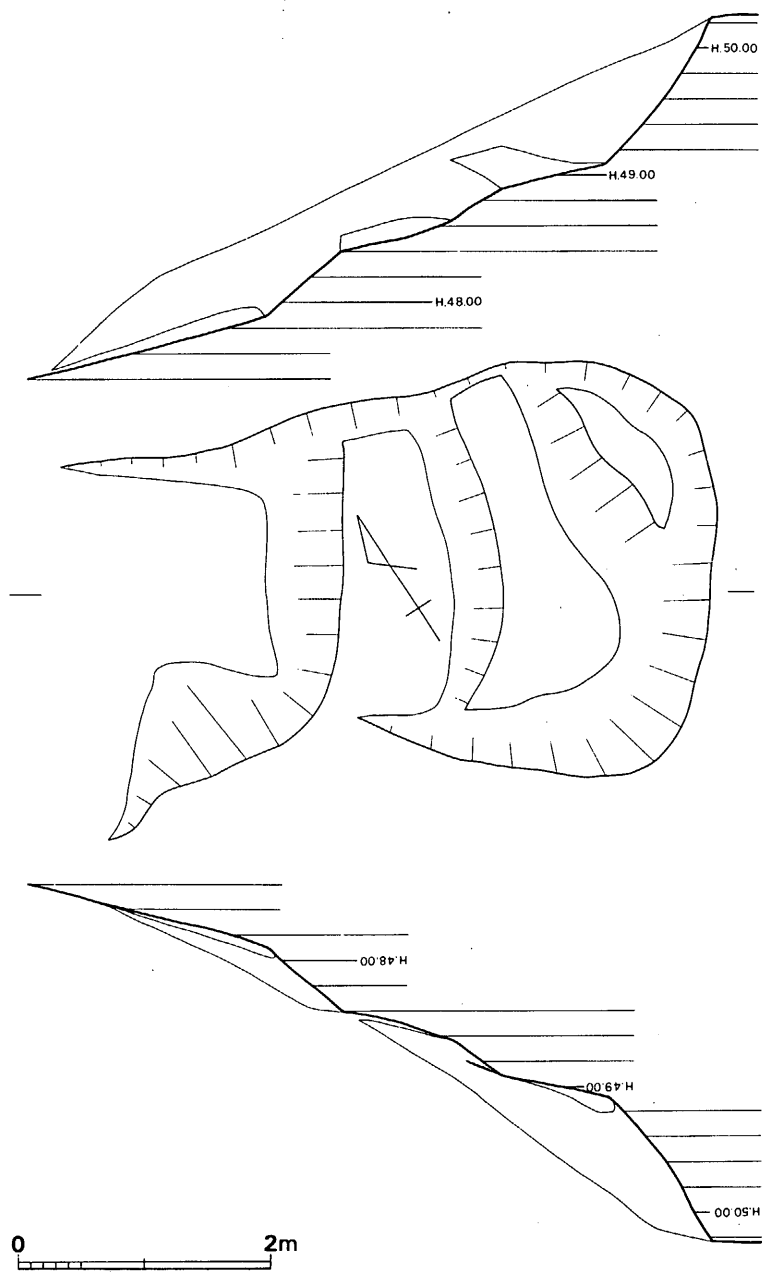
なお、各個体の詳細については一覧表(P27～36)を参照されたい。

註1. 福岡県教育委員会『野添・大浦窯跡群』「福岡県文化財調査報告書」第43集 1970

註2. 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」XVII 1977



第5図 2号窯跡灰原断面実測図(縮尺1/60)

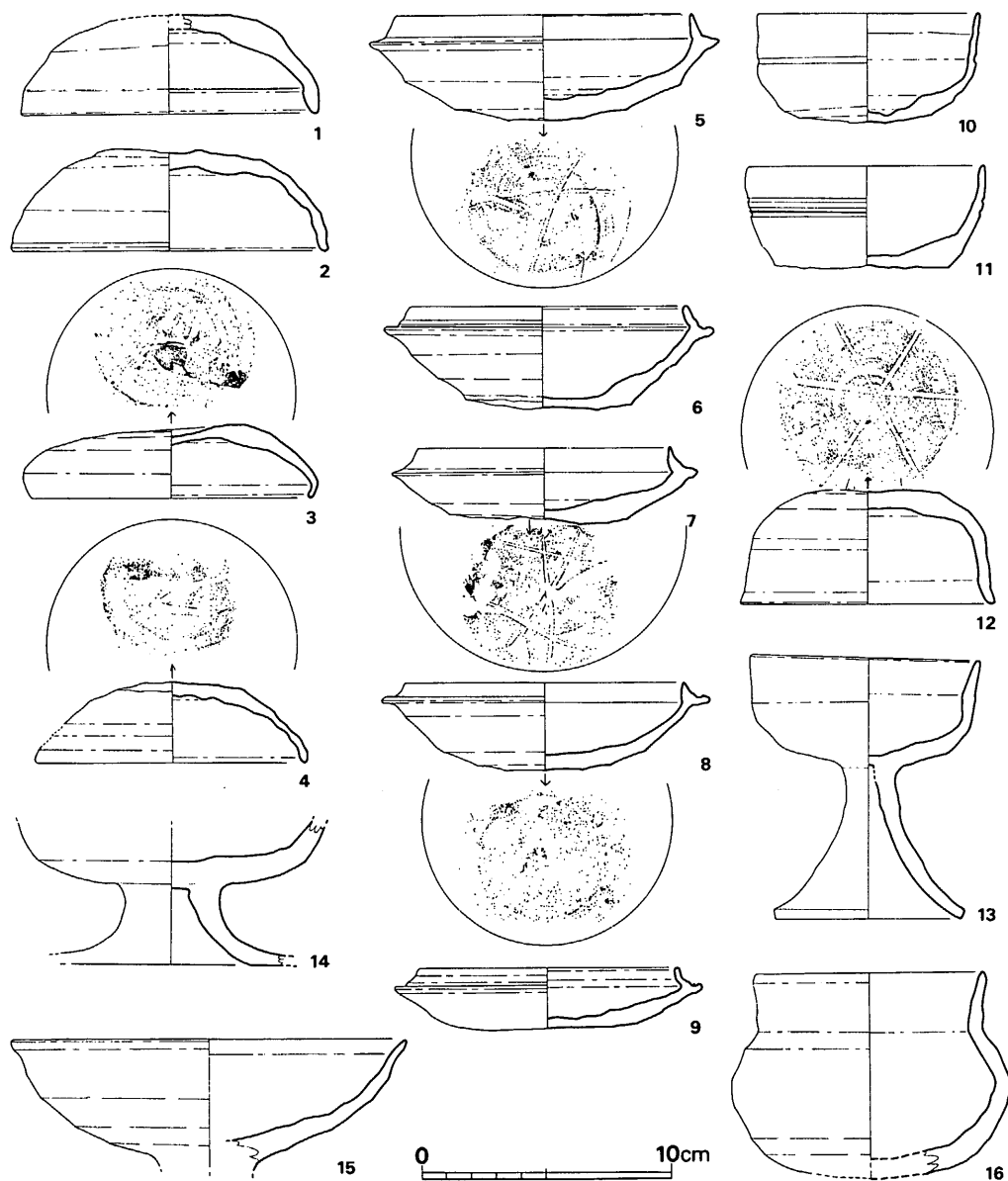


第6図 階段状遺構実測図(縮尺1/60)

(1) 1号窯出土須恵器(第7～9図, 図版5～8)

i) 窯内出土須恵器(第7図)

蓋杯・高杯・埴が出土した。各例の出土位置, 層位は一覧表に記しているが, 5と14, 15が焚口の下層炭化物層で, 2・11が同部上層炭化物層から出土した。焼成部最上層からは4・10・12・13が出土した。



第7図 1号窯内各層出土須恵器実測図(縮尺1/3)

蓋杯 (1~11) B~Dの3類に区分される。

B類: 1・2の蓋と5・6の身が含まれる。蓋の天井部、身の底部は粗いヘラ削りか未調整である。この類はさらにb・cに2区分される。Bb類には1の蓋と5の身があり、蓋の口縁部は太く直立し、体底部も厚い。身は受け部が窪まず、立ち上りが断面三角形に近く、根元が太い。Bc類はBb類に比して薄手である。

C類: 3の蓋と7~9の身が含まれる。蓋身とも扁平である。身の立ち上りの形状にはB類のb・cと同様の細別がある。

D類: 4の蓋と10・11の身が含まれる。4は丸い未調整の天井部をもち、口径10.7cmである。身の底部は平坦で、切り離しのままである。口縁部は直立し、体中央部に1, 2条の沈線を有する。

蓋 (12) 全体に部厚く、口縁部は直立してから軽く外反する。口径10.4cm, 器高4.5cm。

高杯 (13~15) 大小2器種あり、14・15がB類蓋杯と同一層より出土した。13の小形品はD類蓋杯と共伴した。13は口径9.1cm, 器高10.4cmで全体に厚手である。口縁部は僅かに外反し、端部は丸い。14は短脚で裾部は水平に広がる。体底部は部厚い。15は浅く大きく開く杯部をもつ。端部を僅かに外傾させている。

埴 (16) 焚口炭化物層中の出土例である。全体に厚手である。口径9.1cm, 器高約8.2cmである。

ii) 灰原・物原出土須恵器 (第8・9図)

灰原からは蓋杯、蓋、高杯、碗、壺、甗、提瓶、平瓶、甕が出土した。

蓋杯 (17~38) B~Dの3類に区分される。

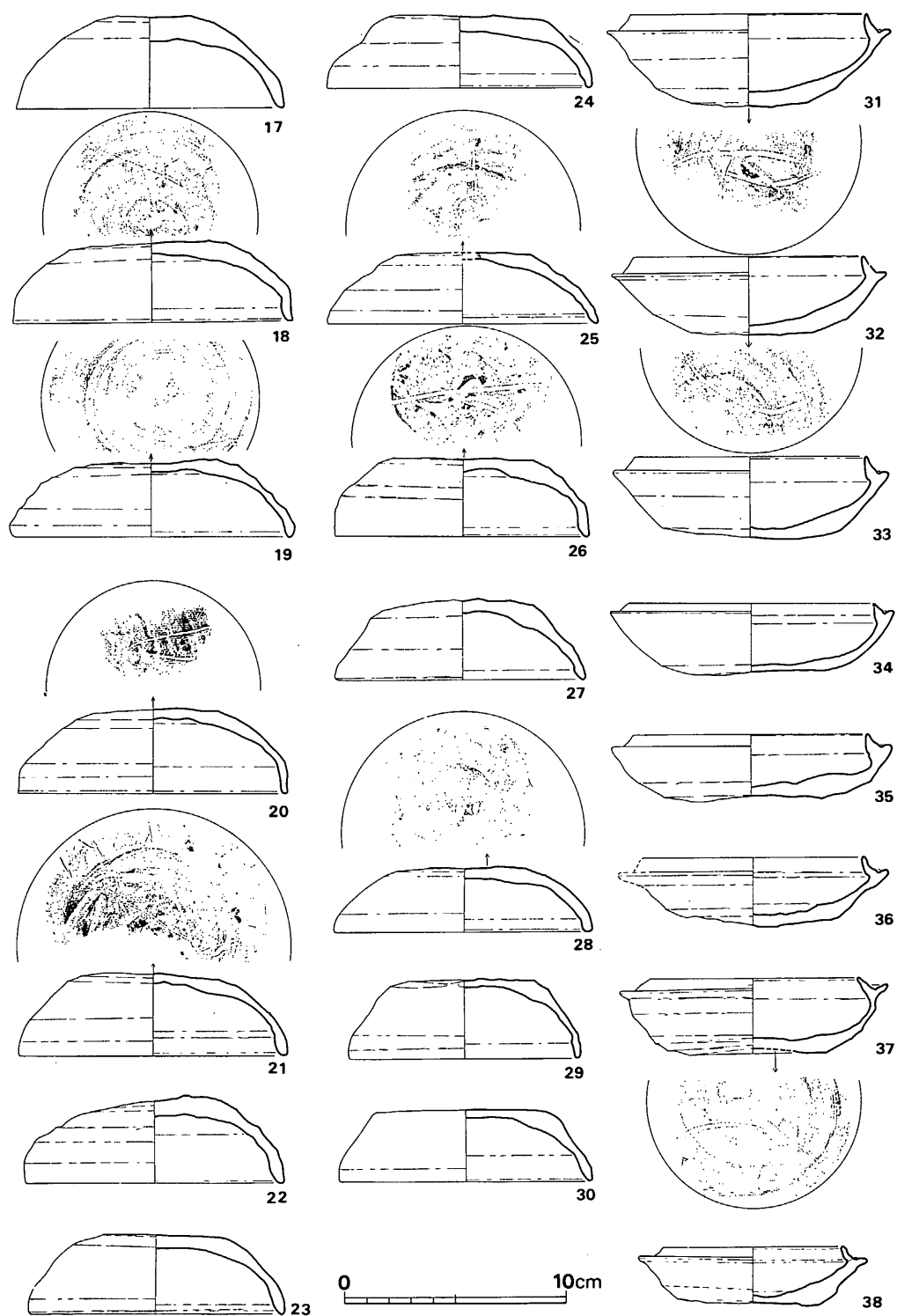
B類: 17の蓋と31の身が含まれる。蓋は部厚く、天井部に丸味を残している。口径12.0cm, 器高4.2cm。身は底部が厚く、丸味をもっている。立ち上りは付根が太い。口径10.7cm, 器高4.2cm。

C類: 大半の蓋杯はこの類の例で、18~28の蓋と32~37の身が含まれる。蓋の天井部及び身の底部は扁平となる。窯内出土例と同様に厚味や身の立ち上り形状でb・c2種に細区分される。蓋の口径は12.6~11.5cm, 器高3.5~2.9cm。身の口径は10.4~9.4cm, 器高3.5~3.0cm。

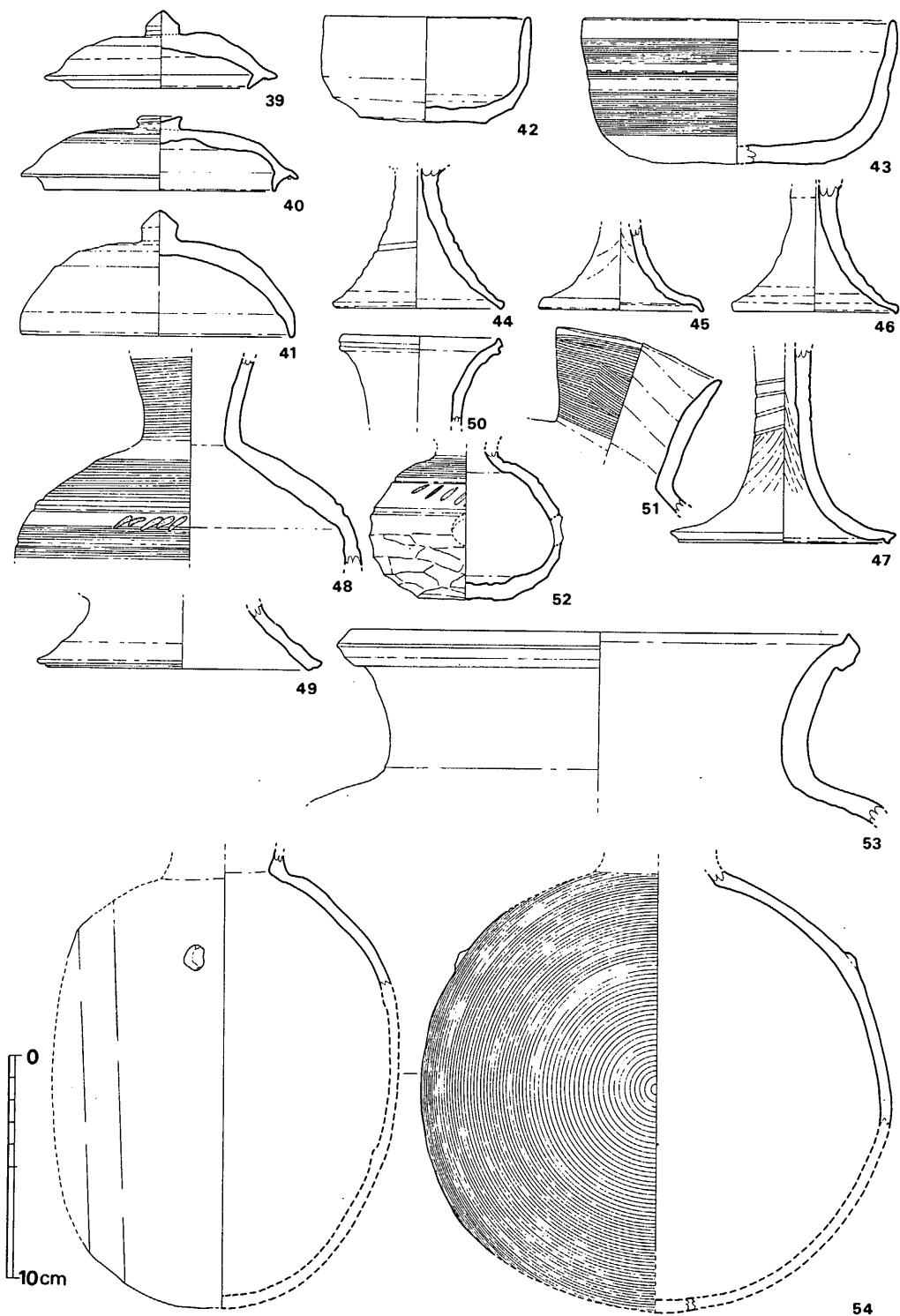
D類: 29・30の蓋と38の身が含まれる。蓋の天井部はまったく平坦となり、体部は直線的に開いて、口縁部は直立する。口径10.3~11.3cm, 器高3.6~3.3cm。身体部に比べて薄手で小さな立ち上りをもつ。口径は8.0cmと小さく、器高は2.5cmである。

蓋 (39~41) 身受けのかえりをもつもの(39・40)とまたないもの(41)がある。また、ツマミは凝宝珠状のものとボタン状のものがある。

高杯 (44~47) 全て小形品の脚部である。脚柱に長短があり、また、裾端に折りかえしのあるものとないものがある。47はB類に、44・46がC類に、45がD類に伴うものかと思われる。



第8図 1号窯灰原出土須恵器実測図① (縮尺1/3)



第9図 1号窯灰原出土須恵器実測図②(縮尺1/3)

椀 (42・43) 大小2種ある。42は口径 9.2cm, 器高 4.7cmである。口縁部は直立し, 底部へう削りである。43は口径14.0cm, 器高 6.5cmである。体部はカキ目調整を施している。42はC類に, 43はB類に伴うものと思われる。

壺 (48・49) 48は細頸壺である。頸部から胴部にかけてカキ目を施している。肩部に上2条, 下1条の浅い巾広の沈線をめぐらし, その間に櫛刺突紋を配している。49の高台は壺に付されるものであろう。

甗 (52) 頸部より上を欠失している。体部から底部にかけて停止へう削りしている。体部上半の2条沈線間に斜行沈線をめぐらしている。

平瓶 (51) 口縁部から頸部にかけてのみで, 焼歪みが甚しい。口径約 7.9cmである。

提瓶 (50・54) 50の口縁部は薄手で, 端部は鋭く立ち上り, 外面に凸帯をめぐらしている。54の体部凸面はカキ目調整を, 平坦面はへう削りしている。把手は退化し, ボタン状である。

甕 (53) 部厚な口縁部をもち, 口縁端部は鋭く立ち上る。口径22.4cm。

(2) 2号窯出土須恵器 (第10~15図; 図版 9~15)

i) 窯内出土須恵器 (第10図)

蓋杯, 椀, 平瓶, 壺が出土した。7は崩壊した壁体の堆積層の上で陥没した埋土中上部から出土した。壁が陥没する際には表土にあったものと思われる。11は最下層床面の出土品である。1~3, 8~10は焚口埋土下部からの一括出土品である。4は焼成部上半面, 5は最下炭化物層, 12・13は最上層床面からの出土である。

蓋杯 (1~10) B類のみである。

B類: 1~6の蓋と7~10の身があり, 窯内出土蓋杯の全てがこの類に含まれる。この類はさらに3区分される。Ba類には1の蓋と7の身がある。7の身は立ち上り高 1.0cm, 口径11.3cm, 最大径14.1cm, 器高 4.5cmである。Bb類には2~6の蓋と8・9の身がある。小形化し, 天井部や底部は厚味である。身の立ち上りは断面三角形に近く, 端部が尖る。Bc類は10の身1点である。底部が平坦で口径も小さい。

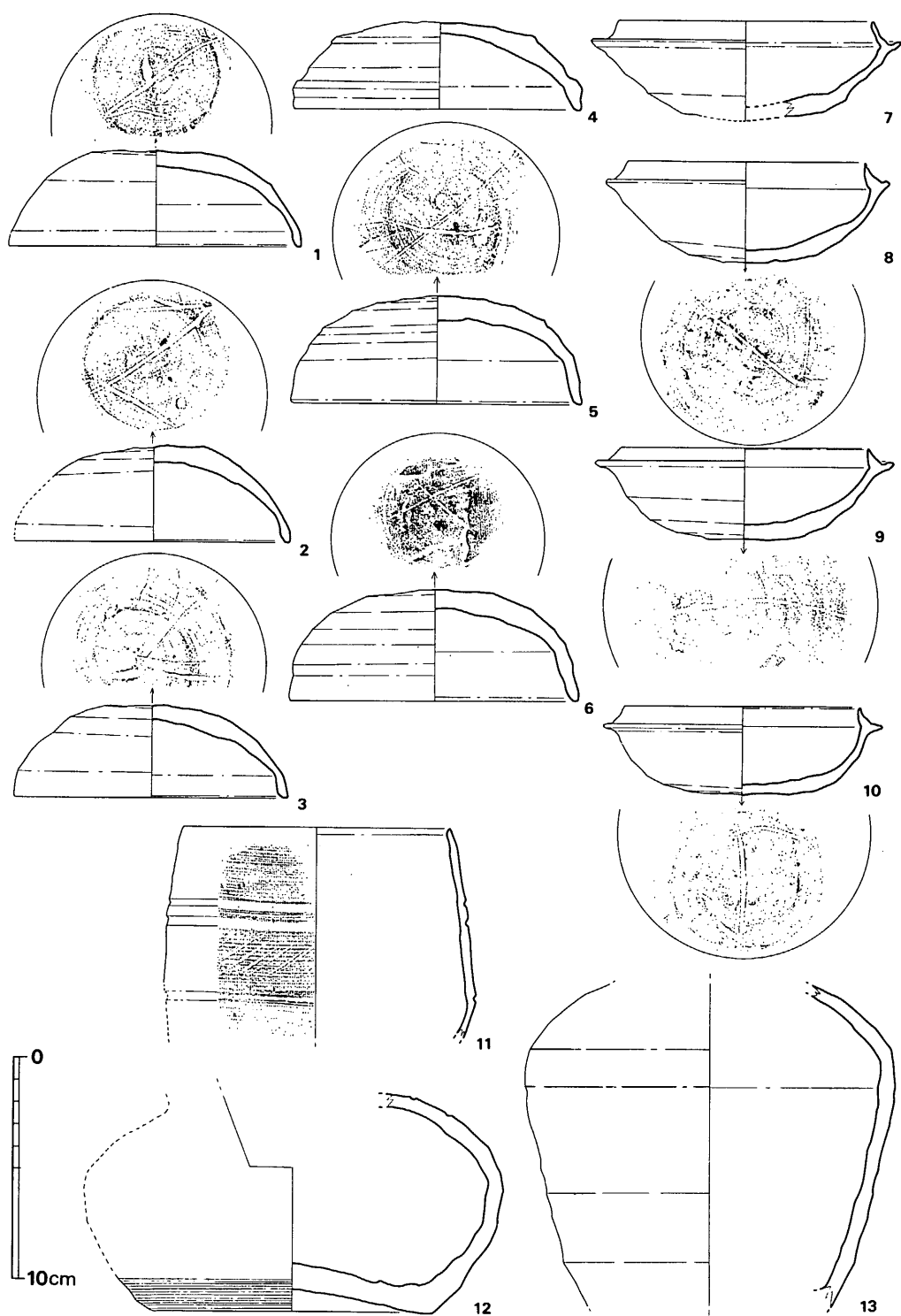
椀 (11) 器高の深い大形品で, 器壁は全体に薄い。内傾する体部にカキ目を施し, 上から3条の沈線を引いている。口径11.9cm。

平瓶 (12) 厚手の器壁をもち, 底部上げ底である。

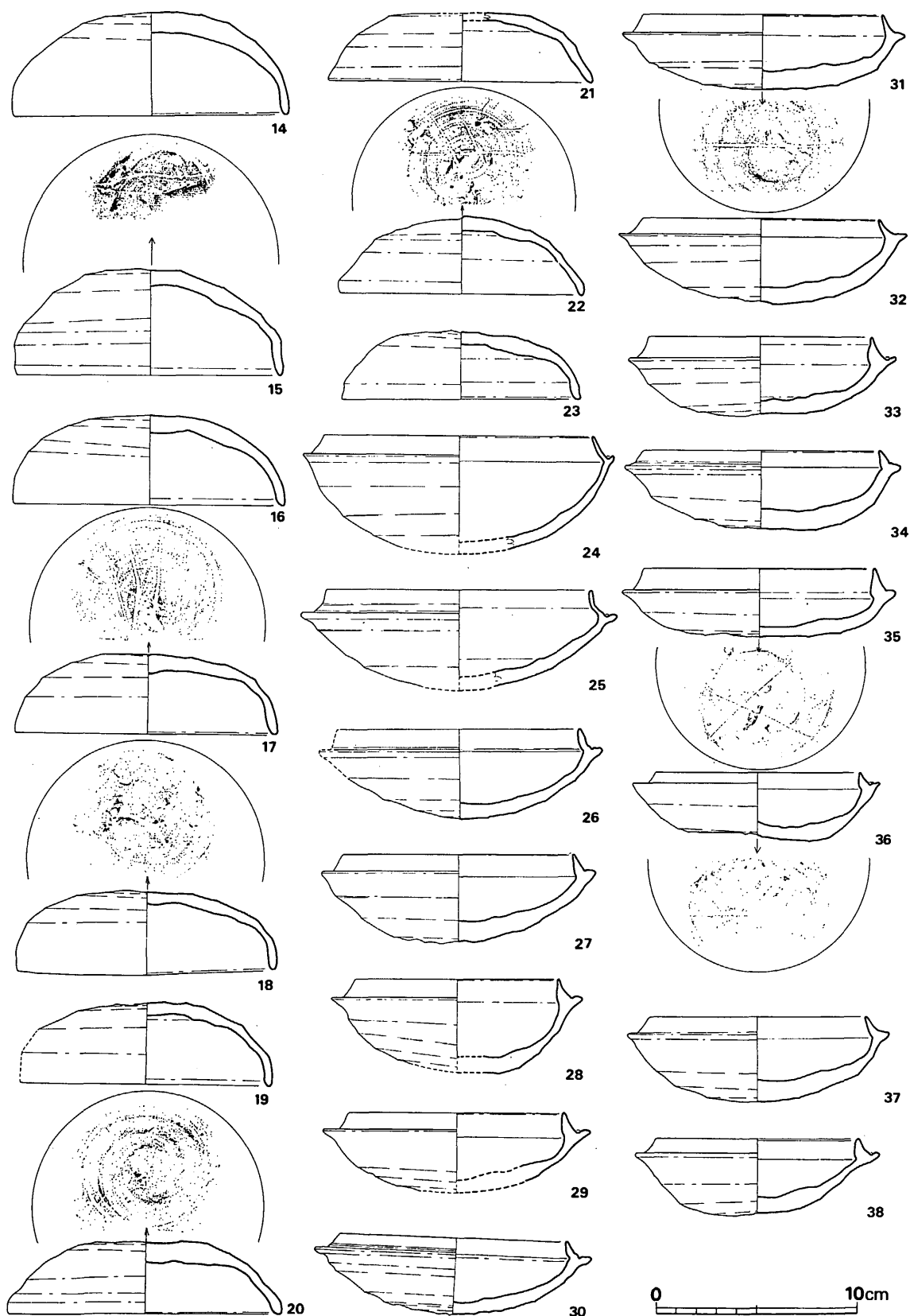
壺 (13) 肩の張る長胴の壺である。体部下半から底部にかけてへう削り調整を施している。

ii) 灰原出土須恵器 (第11~15図)

灰原からは蓋杯, 有蓋・無蓋の高杯・椀, 埴, 甗, 摺鉢, 提瓶, 壺, 甕が出土している。また, 灰原の南側地山からは蓋杯数個が一括して出土した。これらの蓋杯は全てC類に含まれ, 灰原中にはこれらの類を含まないところから, 当窯で焼かれたものかどうか疑問がある。



第10図 2号窯内各層出土須恵器実測図 (縮尺1/3)



第11図 2号窯灰原出土須恵器実測図① (縮尺1/3)

蓋杯 (14~38) A~C類に3区分される。このうちC類については先述した理由で、当窯のものかどうか疑問がある。

A類：14・15の蓋と24・25の身が含まれる。蓋の天井部、身の底部は丸く、身の立ち上りは細く長い。蓋は口径13.2~13.7cm、器高5.1~5.3cmである。身は口径13.2~13.5cm、器高約5.1~5.9cm、立ち上り高は1.1~1.2cmである。

B類：16~22の蓋と26~35の身がある。窯内出土例と同様、大半の蓋杯は当類のものであり、3種に区分される。B a類には16の蓋と26・27の身があり、蓋の口径が大きく、体部は丸い。身の立ち上りは細い。B b類には17~21の蓋と28~35の身が含まれる。蓋は扁平になり、身の立ち上りの形状は受け部との境が太く、断面三角形に近いもの(27~29・33~35)と、細味のもの(26・30~32)とがある。

C類：23の蓋と36~38の身があり、全て灰原南地山上の出土品である。蓋は口径12.1cm、器高3.3cmである。身は口径10.2~10.7cm、器高3.3~4.1cmである。

有蓋高杯 (39~49・55) A・B類に2区分される。

A類：39・40の蓋と44~46の身がある。蓋は口径14cmを越え、器高も高く、天井部は丸い。身脚部が直線的で太い類で方形2段透しである。44・46の杯部立ち上りは細味で長い。

B類：41~43の蓋と47~49の身が含まれる。蓋はA類に比べて口径が小さい。40・41の口唇部の作りはB類蓋杯のそれに類似している。身は脚部が上半で締まり細くなる。方形2段透しである。杯部の立ち上りは短くなる。

無蓋高杯 (50~59) A~B類に2区分され、B類には大小2種がある。

A類：50の杯部があり、55の脚部もこの類に入るかと思われる。50は有段で口縁部は直立する。55の脚部は上半が直立し、裾部端は鋭く立つ。

B a類：51~54・59の長脚品が含まれる。杯部の口径は小さくなり、段部が沈線へと変化している。脚部は上半が細く締まる。53は方形2段透しである。59の短脚も当類に含まれると考えられる。

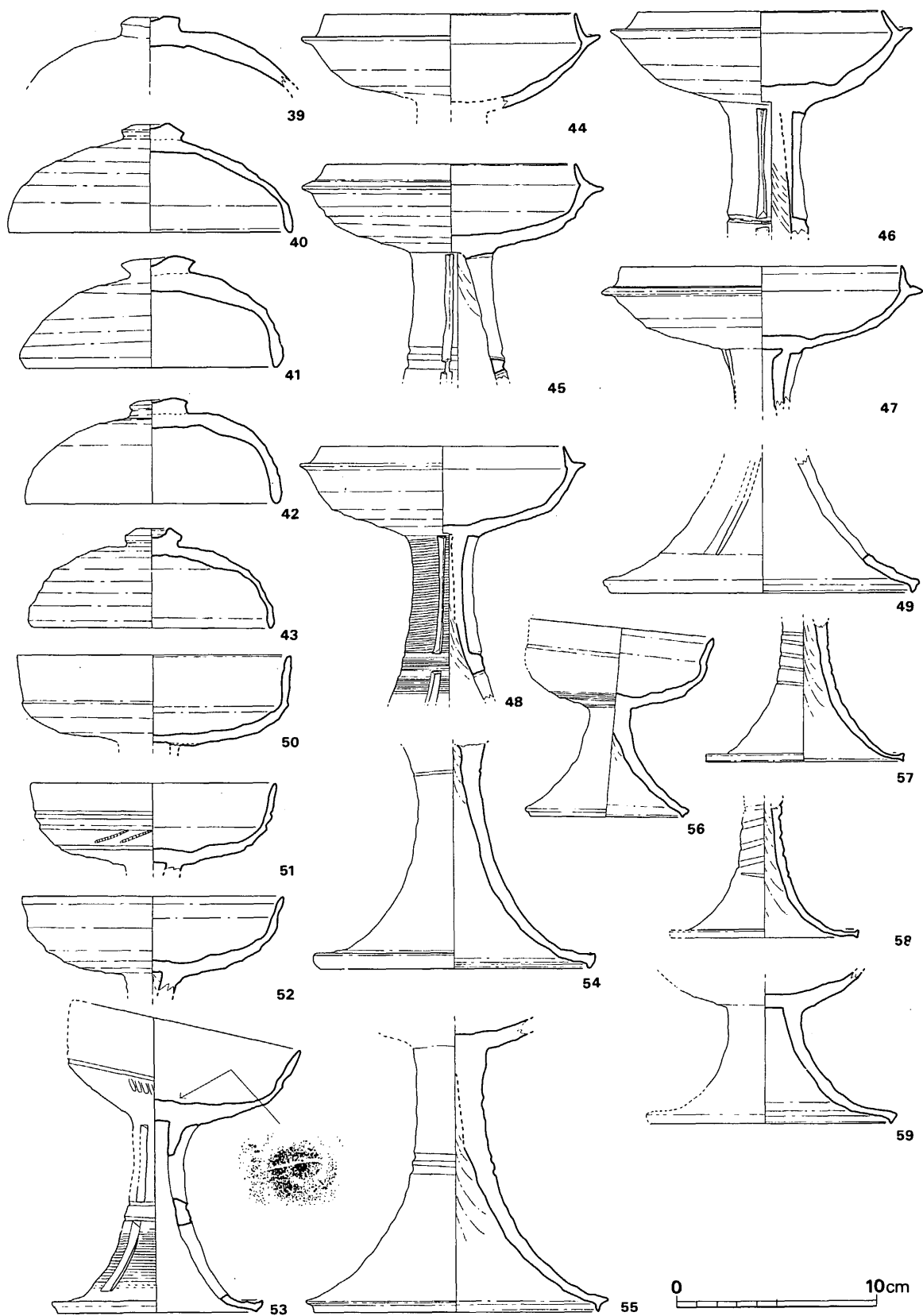
B b類：56~58の小形品である。脚裾端を強くナデつけて薄手にし、裾を広く取るもの(57・58)と、そうでないもの(56)の2種がある。

椀 (60~63) A・B類の2種がある。

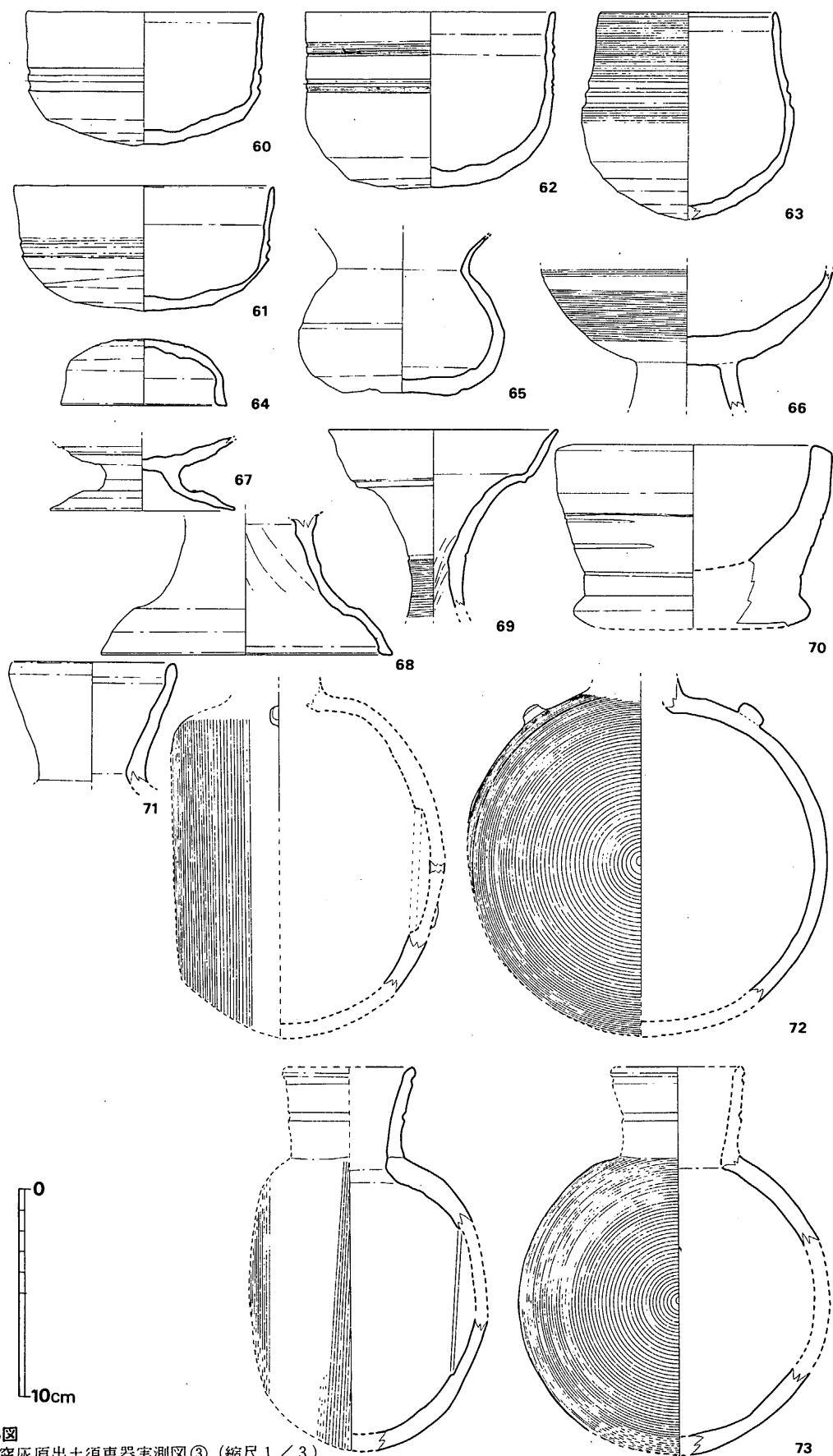
A類：60・61が含まれる。体部有段で、口縁部は薄く、直立する。

B類：62・63が含まれる。体部に2条単位の沈線を有し、全体にA類より薄手である。62は口縁部が外傾するのに対し、63は内傾する。

埴 (64・65) 64は短頸埴の蓋と思われる。口縁部は厚く、若干外反する。65は広口で、底部は切り離したのみでへう削りしていない。



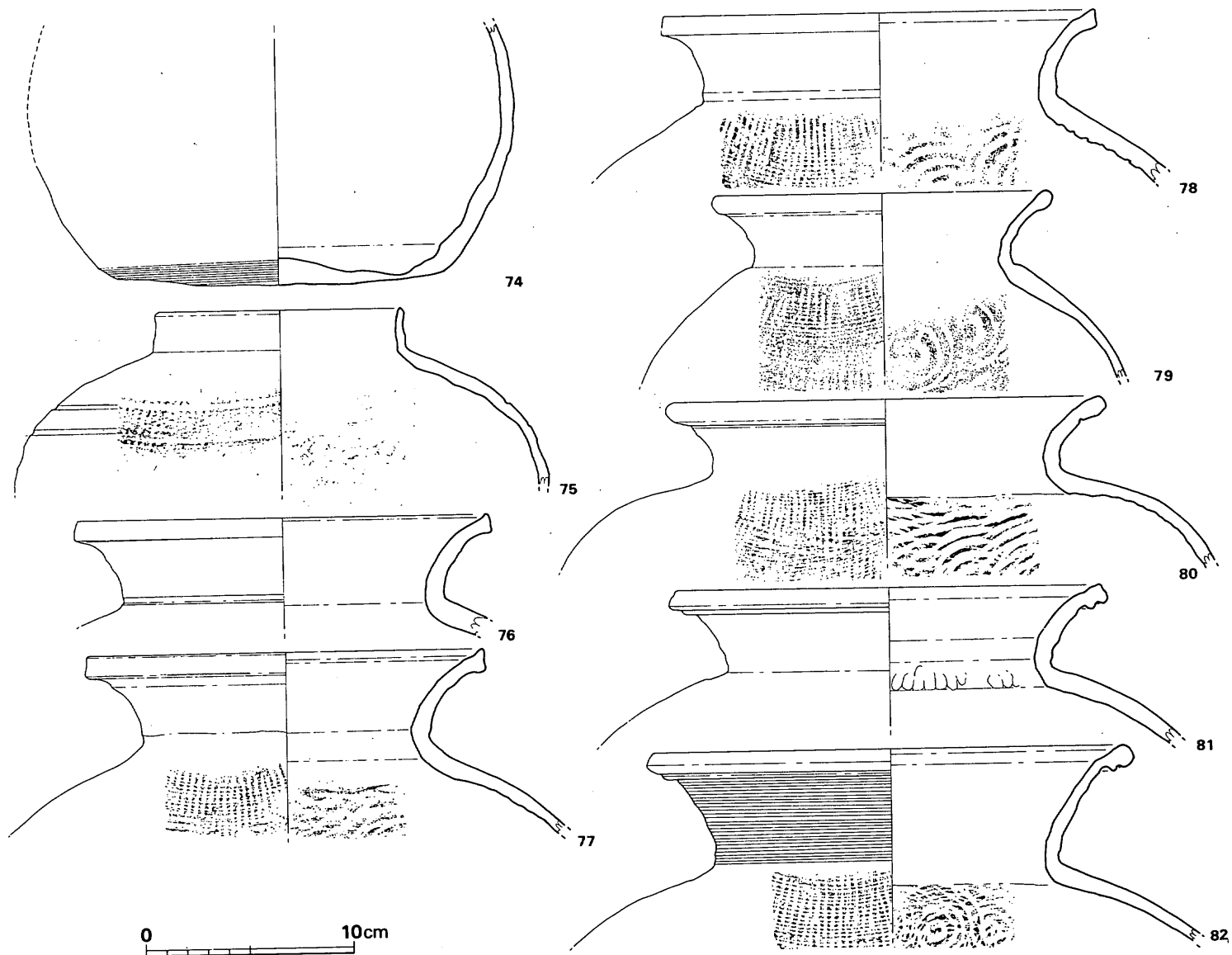
第12図 2号窯灰原出土須恵器実測図② (縮尺1/3)

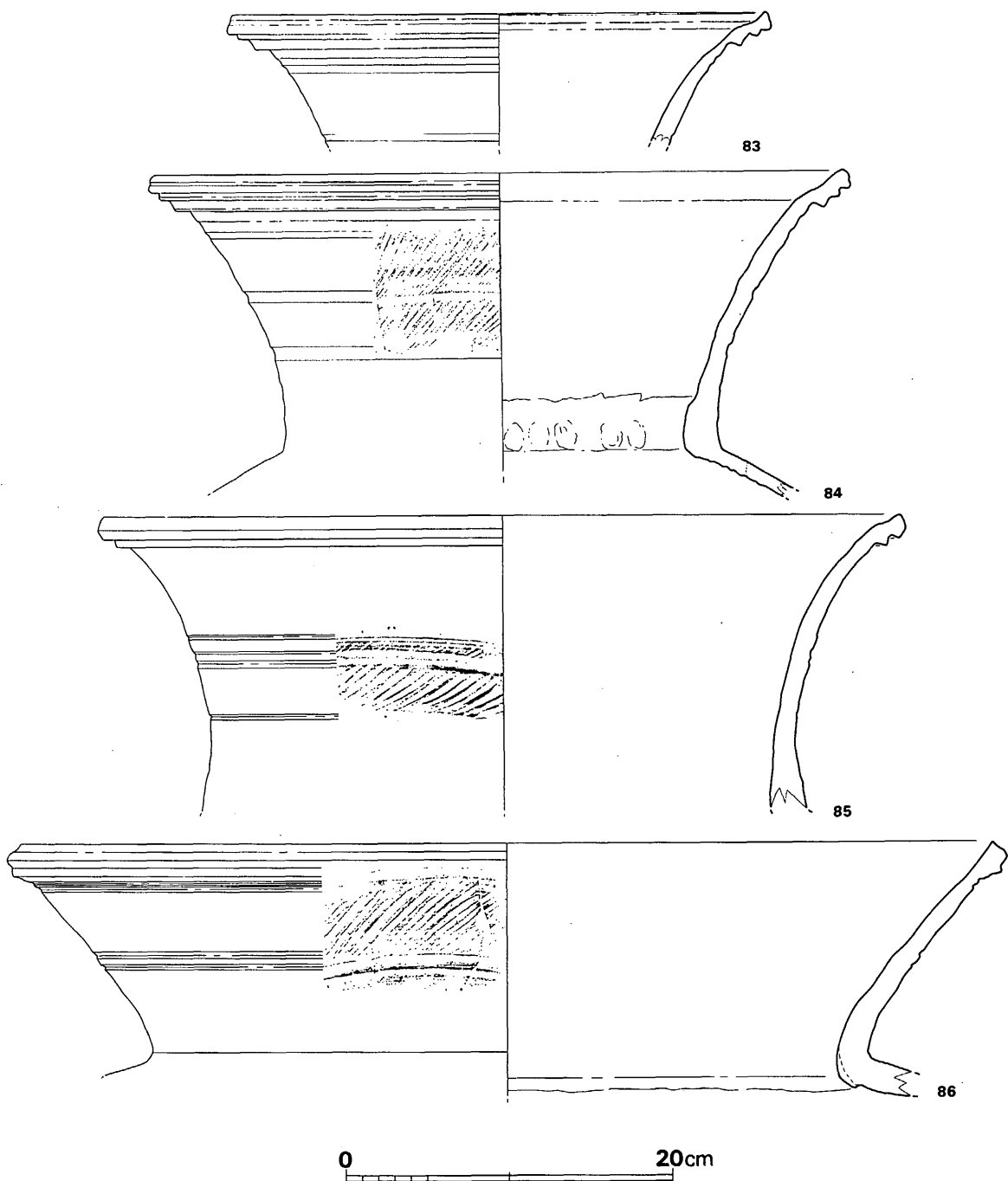


第13図

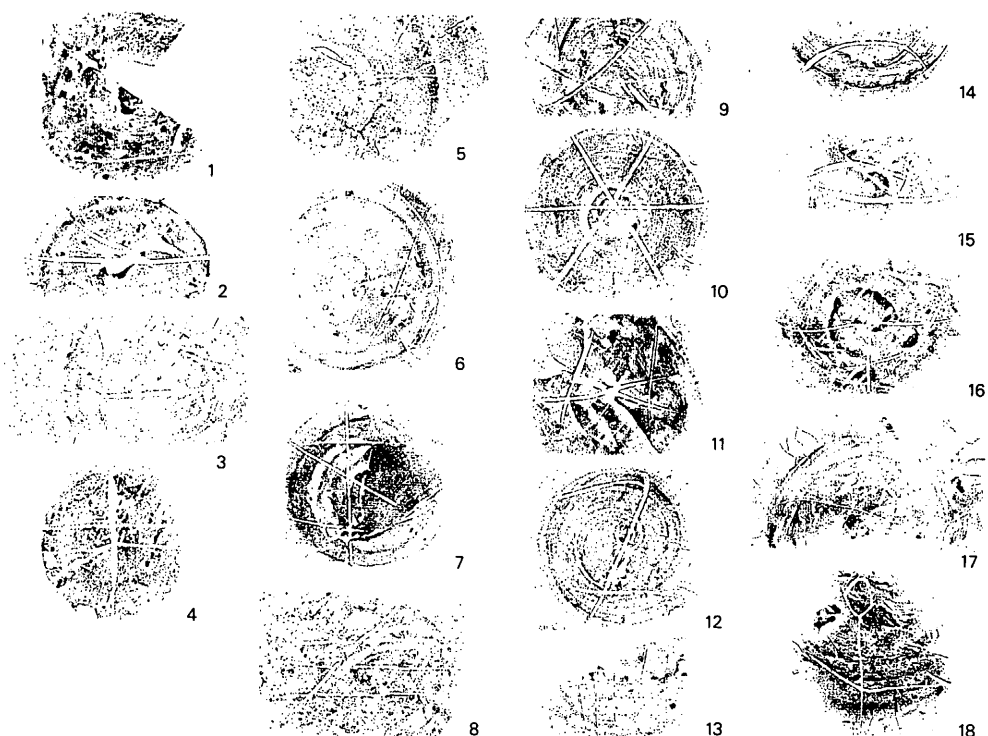
2号窯灰原出土須恵器実測図③ (縮尺1/3)

第14图 2号窯灰原出土須恵器実測図④ (縮尺1/3)





第15図 2号窯出土須恵器実測図⑤ (縮尺1/4)



第16図 1号窯出土須恵器へう記号拓影(縮尺1/3)

脚付碗 (66) 脚部は太い。球形碗部は厚手で、外面カキ目調整である。

高台付壺 (67・68) 高台部のみである。67は柱部は短かく、裾部は広い。68は裾部が立ち、柱部は長い。中形壺の高台部であろう。

甕 (69) 頸部は細く締り、頸部中央の沈線より下に外面ハケ目を施している。

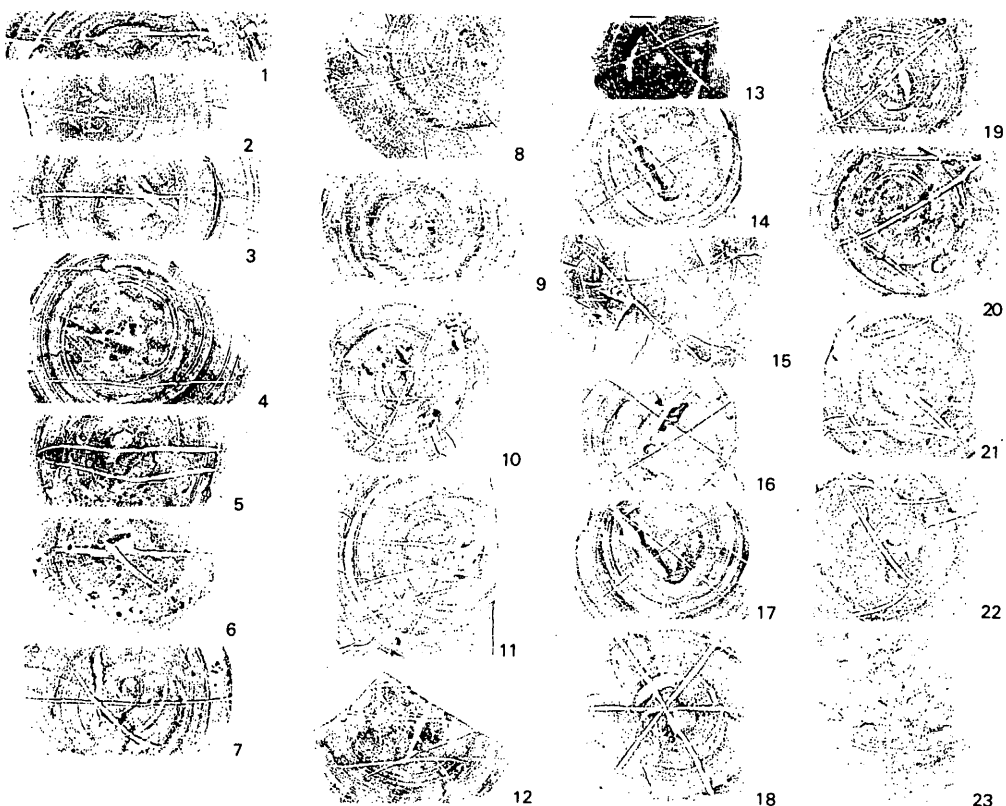
摺鉢 (70) 厚手の短頸である。底部中央が剥げ落ちており、細部は不明。

提瓶 (71～73) 72は把手がボタン状をなす。71の口縁端部は肥厚し丸い。

中形壺 (74・75) 平底壺と直口壺がある。

中形甕 (76～82) 口縁部の形状に3種みられる。口縁端部が直立し、内面つまみ出されているもの(76～78)、肥厚し丸いもの(79・80)と外面の端部下に一条凸帯をもつものがある。

大形甕 (83～86) 破片は大量に出土したが、口径を推定しうる例は図示したもののみである。いずれも口縁端下に1～2条の凸帯を有し、頸部に数条の沈線を施している。84～86は沈線間に斜行連続沈線をめぐらしている。



第17図 2号窯出土須恵器ヘラ記号拓影(縮尺1/3)

(3) 小 結

1・2号窯の窯内及び灰原から出土した須恵器は以上の通りである。蓋杯及び高杯を中心としてA～D類に区分した。このうち1号窯からはB～D類が、2号窯からはA～C類が出土している。

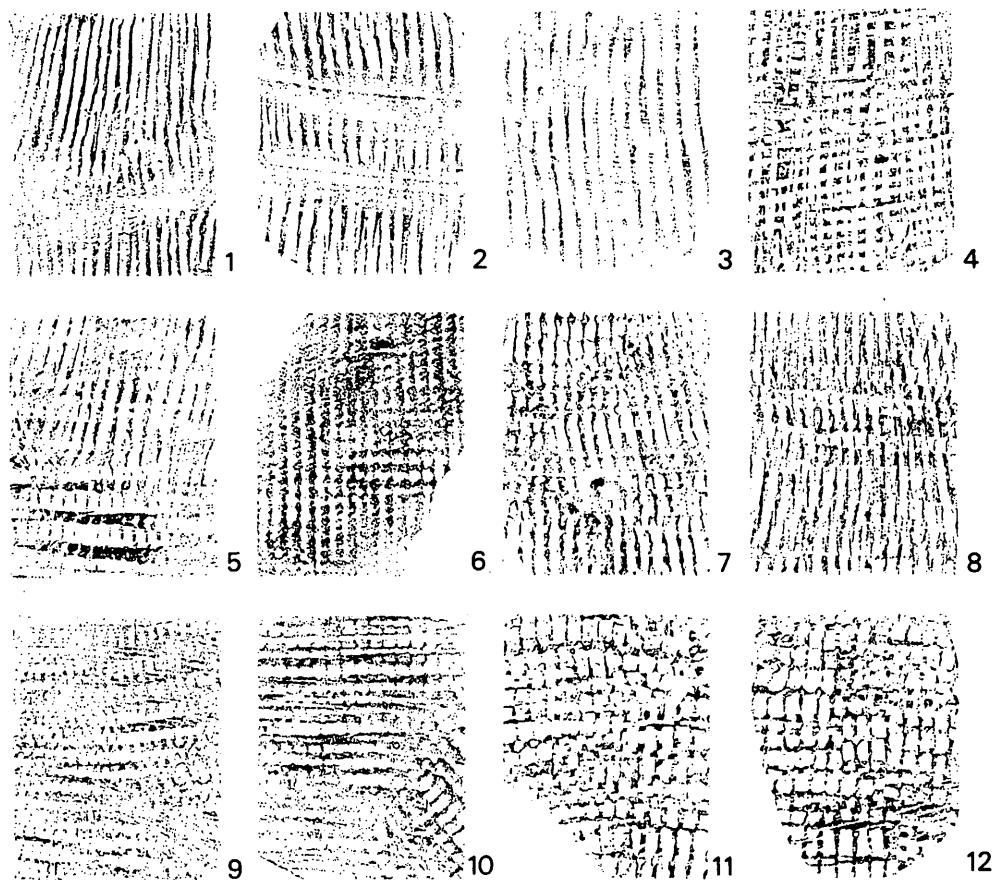
i) 各窯出土各類須恵器の出土傾向

2号窯出土のA類蓋杯は灰原中のみの出土例であるが、2号窯開窯期を示すものと考えられる。唯しその期間は出土量からみて短期間であったと思われる。

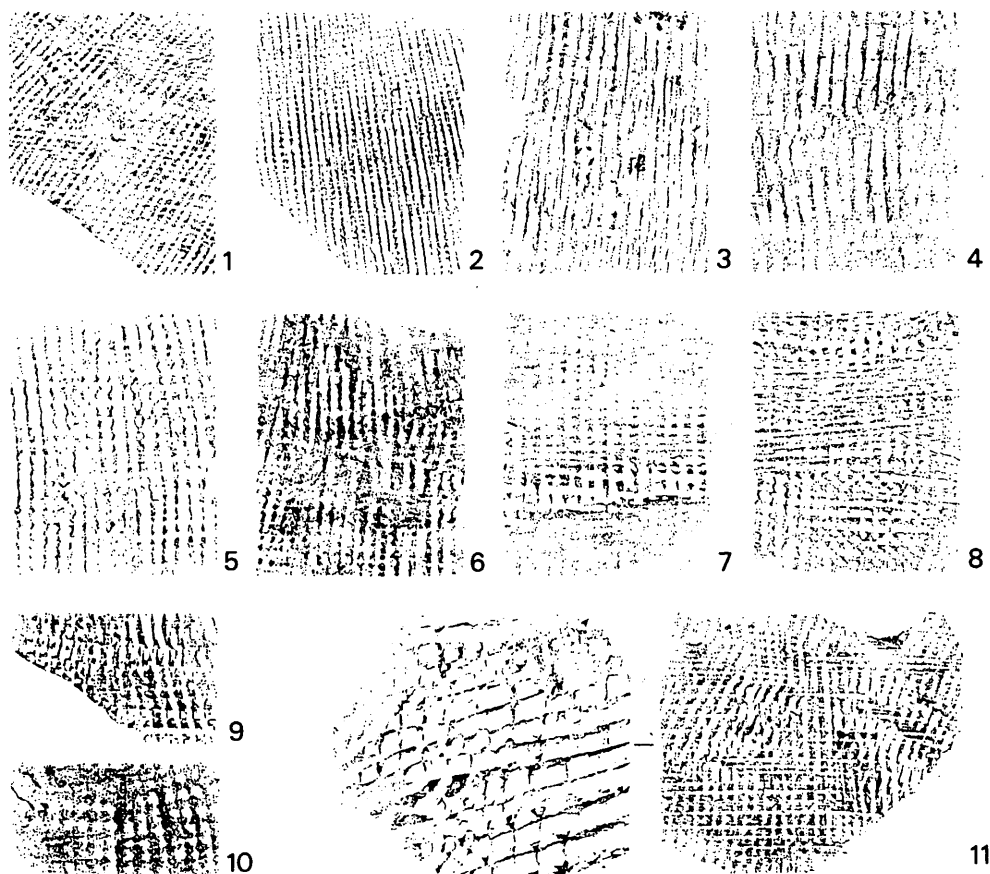
B類は2号窯操業期間の中心をなすもので、出土品の大半はこの類に含まれる。その中でも前半に集中する。図示した甕・提瓶・各種壺・甕もB類に含めてよからう。

C類の蓋杯は灰原南側の地山上で出土したもののみであり、それ以外に出土品はない。当窯で焼かれたものとするには疑問がある。

1号窯出土のB類蓋杯は少例で、その中でも後半のものである。高杯はない。B類が開窯期



第18図 1号窯出土須恵器外面叩き拓影（縮尺1／2）



第19図 2号窯出土須恵器外面叩き拓影（縮尺1／2） — 25 —

を示すが、その期間は短かったと思われる。

C類は1号窯操業期間の大半を占めている。甕の頸部は付根が極めて細く、提瓶の把手はかろうじて痕跡を留めている。

D類は焼成部内の最上床面から出土しており、この類が閉窯期を示している。しかし量的にはC類にはるかに及ばない。

ii) ヘラ記号について

ヘラ記号は2号窯出土高杯1点を除き、全て蓋杯に付されている。

1号窯 (第16図)

直線組み合わせが大半(1~13)を占め、それに曲線(14~18)が僅かに加味されている。施文道具としてはヘラ金属器がある。13の線は鋭くて深く、金属以外は考えられない。直線文の組み合わせは平行、直交、斜行があるが、平行線に斜行線1本を組み合わせた例が最も多い。17は×印をヘラで、長S字を金属器で引いており、唯一の例である。18は特殊なヘラ記号であり、2個ある。

2号窯 (第17図)

1号窯でみられた弧状印はまったくなく、一条線が増加している。他の印はまったく1号窯と同様で、平行線に1条の斜行線を加えた例が多い。また、唯一ではあるが23の特殊例が1号と同様にみられることは興味深い。

iii) 須恵器外面叩きについて

壺、甕類の外面叩きは両窯バラエティーがあり、1個体に2種以上の叩き板を用いた例もある。また叩きの方向は縦横に走る例が多く、通常みられる方向性がくずれている。基本的には平行叩きと格子叩きである。内面は青海波叩きであるが、2号窯で1点、格子叩きを用いた例がある。

1号窯 (第18図)

1~4が平行叩き、5~8が格子叩きの上から平行叩き、9~12が格子叩きである。

平行叩き：1の溝巾は1.5~2.0mmである。板巾は3.8cm程度残っている。2は2.0~2.5mmの溝巾をもち、板巾は1とほぼ同様と思われる。上に粗いカキ目が施されている。3は3.0~4.0mmの溝巾をもつ粗い叩きである。板巾は先と変わらない。4は1の叩きが縦横に施された例である。

5~8の格子叩きの上に打たれた平行叩きは全ての2の叩きと同巾である。

格子叩き：9は最も細かい長格子叩きである。各方1.2×2.0×4mmである。板巾の残りは3cm程度である。10は3mm方眼の正格子で板巾の残りは3~4cmではあるが、不明確である。

11・12は4×6mmの長格子叩きである。板巾の残りは3.8cmである上に平行叩きを施された例のうち6は9の、7は10の、5は8の格子叩きが残っている。

2号窯（第19図）

1～4が平行叩き，5～11が格子叩きである。

平行叩き：1・2は極めて細かい平行叩きで，溝巾1.0～1.5mmである。板巾の残りは3.6～3.7cmである。縦横に叩き上げる例の多い中で，一直線に美事に叩き上げている。3は1号窯の2の，4は1号窯の3の叩きと同様である。

格子叩き：9は第15図84の，10は第14図79の叩きである。また11は7と共伴して出土し，B類の蓋杯（第10図7）と共伴した。5～10の格子叩きは1号窯の10と同様である。11は図上右が外面，左が内面である。外面には10×2mmの長格子叩きが打たれ，カキ目調整で多くは消えている。板巾の残りは約3.0cmである。内面には青海波叩きの上に5mm方眼の正格子叩きが施されている。

表1 1号窯出土須恵器観察表

() 内数値は現存値

遺物番号	器種	挿図 図版	出土地点	法 ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ 記号	調整法及び特徴	時期	備考
1	杯蓋	第7図 図版5	燃焼部炭化物層	① 4.0 ② 12.0		内外面ヨコナデ，天井部未調整 胎土は砂粒含む，焼成軟質， 色調は灰黄褐色	B	
2	杯蓋	第7図 図版5	焚口最上床面	① 4.0 ② 12.3	○	内外面ヨコナデ，天井部未調整 胎土は砂粒を若干含む，焼成硬質， 色調灰黄色	B	
3	杯蓋	第7図 図版5	焚口炭化物層	① 2.8 ② 11.4	○	内外面ヨコナデ，天井部回転へら 削り 胎土は砂粒殆ど含まず，焼成 良好，色調暗灰色	C	
4	杯蓋	第7図 図版5	焼成部最上層	① 3.3 ② 10.8	○	内外面ヨコナデ，天井部ナデ 胎土は砂粒を若干含む，焼成 硬質，色調暗灰色	C	
5	杯身	第7図 図版5	焚口下層炭化物層	① 4.2 ② 11.9	○	内外面ヨコナデ，底部へら削り， 1/3欠損 胎土は砂粒若干含む，焼成硬 く良好，色調は淡い小豆色	B	
6	杯身	第7図 図版5	焚口最上床面	① 4.1 ② 10.9		内外面ヨコナデ，底部未調整， 内面に黒色の自然釉付着 胎土は砂粒若干含む，焼成硬質， 色調明灰黄色	B	
7	杯身	第7図 図版5	燃焼部炭化物層	① 2.9 ② 10.2	○	内外面ヨコナデ，底部未調整 胎土は砂粒若干含む，焼成硬質で 良好，色調灰色	C	
8	杯身	第7図 図版5	燃焼部上半床 (炭化物の上)	① 3.5 ② 11.2	○	内外面ヨコナデ，底部へら削り 胎土は砂粒含む，焼成は硬く良 好，色調は灰色	C	
9	杯身	第7図 図版5	灰原表土	① 2.5 ② 10.2		内外面ヨコナデ，底部調整法不明 胎土は小砂粒を若干含む，焼成 硬質，色調灰色	C	
10	碗	第7図 図版5	焼成燃焼部中溝底	① 4.4 ② 8.7		内外面ヨコナデ 胎土は砂粒を若干含む，焼成 硬質，色調暗灰色	D	
11	碗	第7図 図版5	焚口最上床面	① 4.0 ② 9.3		内外面ヨコナデ，底部未調整 胎土は細砂粒を若干含む，焼成 やや軟質，色調灰色	D	

遺物番号	器 種	挿図 図版 番号	出 土 地 点	法 量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ 記号	調整法及び特徴	時期	備 考
12	蓋	第7図 図版 5	焼成・燃焼部中間床	① 4.5 ② 10.1	○	内外面ヨコナデ 胎土は砂粒若干含む。焼成硬質で良好。色調は灰色	B C	
13	高 杯	第7図 図版 5	焼成・燃焼部中間床 焼成部最上層	① 10.3 ② 9.1		内外面ヨコナデ 胎土は砂粒殆ど含まず。焼成硬質良好。色調暗灰色	B C	
14	高 杯	第7図 図版 6	焚口下層	①(5.7) ②(12.1) ④(8.9)		外面ヨコナデ。杯部内面は気泡大きく凹凸著しい。脚部に一部灰釉 胎土は砂粒多し。焼成硬質。色調暗灰色	B	
15	高杯杯部	第7図 図版 5	焚口下層炭化物層	①(5.3) ② 15.5		内外面ヨコナデ 胎土は砂粒を若干含む。焼成硬質。色調暗灰色	B	
16	埴	第7図 図版 6	灰原焚口炭化物層	①(8.1) ② 9.0		内外面ヨコナデ 胎土は砂粒を若干含む。焼成硬質。色調暗灰色	B	
17	杯 蓋	第8図 図版 6	焼成・燃焼部下層床	① 4.1 ② 11.8	○	内外面ヨコナデ。天井部未調整 胎土は砂粒多く不良。焼成良好。色調灰色	B	
18	杯 蓋	第8図 図版 6	灰原南地山上	① 3.5 ② 12.3	○	内外面ヨコナデ。天井部ヘラ削り 胎土砂粒若干。焼成硬質良好。色調灰色	C	
19	杯 蓋	第8図 図版 6	灰 原	① 3.0 ② 12.2	○	内外面ヨコナデ。天井部未調整 胎土は砂粒を若干含む。焼成やや硬質。色調黄灰色	C	
20	杯 蓋	第8図 図版 6	灰原南地山上	① 3.8 ② 11.8	○	内外面ヨコナデ。天井部未調整 胎土は砂粒若干。焼成良好。色調灰色	C	
21	杯 蓋	第8図 図版 6	灰 原	① 3.7 ② 11.8	○	内外面ヨコナデ 胎土は稍攪されている。焼成良好。色調(内面…小豆色。外面…好黒色)	C	
22	杯 蓋	第8図 図版 6	灰 原	① 3.7 ② 11.4		内外面ヨコナデ。天井部回転ヘラ削り 胎土は砂粒多く不良。焼成良好。色調(内面…灰色。外面…黒褐色)	C	
23	杯 蓋	第8図 図版 6	灰原南地山上	① 3.5 ② 11.2		内外面ヨコナデ。天井部ヘラ削り 胎土は砂粒多く。焼成硬質。色調灰色	C	
24	杯 蓋	第8図 図版 6	灰原南地山上	① 3.2 ② 11.7		内外面ヨコナデ 胎土は砂粒少く良好。焼成良好。色調灰色	C	
25	杯 蓋	第8図 図版 6	灰 原	① 3.2 ② 12.0	○	内外面ヨコナデ。天井部未調整 胎土は砂粒を若干含む。焼成硬質。色調灰色	C	約3/4欠く
26	杯 蓋	第8図 図版 6	灰 原	① 3.5 ② 11.2	○	内外面ヨコナデ。天井部未調整 胎土砂粒多し。焼成硬質。色調灰色	C	
27	杯 蓋	第8図 図版 7	灰 原	復元 ① 3.6 ② 10.9		内外面ヨコナデ。天井部不明 胎土は砂粒を若干含む。焼成硬質。色調暗褐色	C	

遺物番号	器 種	補図 図版 番号	出 土 地 点	法 量 (cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ 記号	調整法及び特徴	時期	備 考
28	杯 蓋	第8図 図版 7	灰 原	復元 ① 2.8 ② 11.3	○	内外面ヨコナデ、天井部回転ヘラ削り 胎土は砂粒多し、焼成良好、 色調暗灰色	C	
29	杯 蓋	第8図 図版 7	灰原南地山上	① 3.6 ② 10.2		内外面ヨコナデ、天井部静止ヘラ削り 胎土は砂粒若干含む、焼成硬質、 色調灰色	D	
30	杯 蓋	第8図 図版 7	灰原南地山上	① 3.2 ② 11.3	○	内外面ヨコナデ 胎土は砂粒多く、焼成良好、 色調灰色	D	
31	杯 身	第8図 図版 7	灰原南地山	① 4.1 ② 11.8	○	内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 胎土は砂粒殆ど含まず、焼成硬質、 色調灰色	B	
32	杯 身	第8図 図版 7	灰原表土	① 3.5 ② 10.2	○	内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 胎土は大砂粒を含む、焼成硬質 色調灰色	C	
33	杯 身	第8図 図版 7	灰 原	①(3.2) ② 10.3	○	内外面ヨコナデ 胎土砂粒多く含む、焼成硬い、 色調灰色	C	
34	杯 身	第8図 図版 7	灰原南地山上	復元 ① 3.1 ② 10.9	○	内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 胎土は大粒の砂粒多し、焼成良好、 色調灰色	C	
35	杯 身	第8図 図版 7	灰原表土	① 2.8 ② 10.4	○	内外面ヨコナデ、底部未調整 胎土砂粒若干含む、焼成硬質、 色調灰色	C	
36	杯 身	第8図 図版 7	灰原表土	① 3.1 ② 9.8		内外面ヨコナデ、底部未調整か？ 胎土は砂粒を殆ど含まず、焼成硬質、 色調灰色	C	
37	杯 身	第8図 図版 7	灰原表土	① 3.4 ② 9.2	○	内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 胎土は砂粒を少量含む、焼成硬質、 色調暗灰色	C	
38	杯 身	第8図 図版 7	灰 原	① 2.6 ② 7.9	○	内外面ヨコナデ、底部未調整 胎土は細砂粒を少量含む、焼成軟質、 色調灰色	D	
39	蓋	第9図 図版 7	灰原下層	① 3.5 ② 7.9		内外面ヨコナデ、天井部ヘラ削り 胎土は砂粒含む、焼成硬質、 色調灰色	B	
40	蓋	第9図 図版 7	灰 原	① 3.3 ② 10.2		内外面ヨコナデ、天井部カキ目 胎土は砂粒を殆ど含まず、焼成硬質良好、 色調灰色	B	
41	蓋	第9図 図版 7	灰原下層	復元 ① 5.6 ② 12.1		胎土は砂粒を殆ど含まず、焼成硬質、 色調灰色	B	
42	杯 身	第9図 図版 8	灰 原	① 4.6 ② 9.2		内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 胎土は砂粒若干、焼成良好 色調黒褐色	C D	
43	碗	第9図 図版 8	灰 原	復元 ① 6.5 ② 13.9		内面ヨコナデ、外面上部カキ目 外面底部ヘラ削り 胎土は精製されている、焼成硬質良好、 色調灰色	B C	

遺物番号	器 種	挿図 図版	出土 地 点	法 量(cm)				ヘラ 記号	調整法及び特徴	時期	備 考
				①器高	②口径	③胴径	④底径				
44	高杯 脚	第9図 図版8	燃焼部炭化物層	①(6.4)	④ 7.4				内外面ヨコナデ 胎土は細砂粒を若干含む。焼成 硬質。色調暗灰色	C	
45	高杯 脚	第9図 図版8	灰原表土	①(3.8)	④ 7.3				内外面ヨコナデ 胎土は砂粒をわずかに含む。焼 成硬質。色調灰色	D	
46	高杯 脚	第9図 図版8	灰 原	①(5.7)	④ 7.2				内外面ヨコナデ 胎土は砂粒多く含む。焼成硬質 色調暗灰色	C	
47	高杯 脚	第9図 図版8	灰原表土	①(8.8)	④ 9.4				胎土は砂粒若干含む。焼成やや 硬質。色調淡灰色	B	
48	長 頸 壺	第9図 図版8	灰原南地山上	①(9.4)					内面ヨコナデ。外面カキ目 胎土は砂粒多い。焼成硬質。 色調暗灰色	B C	1/2欠損
49	脚 台	第9図 図版8	灰 原	①(3.1)	④ 12.6				内外面ヨコナデ 胎土は砂粒を多く含む。焼成硬 質。色調灰色	B C	
50	提瓶口縁	第9図 図版8	灰原表土	①(4.1)	② 6.9			○	内外面ヨコナデ 胎土は砂粒多く含む。焼成硬質 色調暗灰色	B D	
51	平瓶口縁	第9図 図版8	灰原下層	①(8.8)	② 7.8				口縁内面ヨコナデ。外面不規則 なカキ目。口縁部のみ残る 胎土は砂粒若干含む。焼成硬質 色調灰色	B D	
52	罎	第9図 図版8	灰原	①(6.8)	復元 ③ 8.7 復元 ④ 4.1			○	底部は非常に粗いヘラ削り 口縁部を欠く 胎土は砂粒を多く含む 焼成硬質。色調灰色	C D	
53	壺 口 縁	第9図 図版8	灰原焚口炭化物層	①(9.8)	② 22.2				口縁内外面ヨコナデ。肩部外面 格子目叩き。内面同心円叩き 胎土は砂粒含む。焼成硬質 色調暗灰色	C D	
54	提 瓶	第9図 図版8	灰 原	①(21.4)						C D	

表2 2号窯出土須恵器観察表

() 内数値は現存値

遺物番号	器 種	挿図 図版	出 土 地 点	法 量 (cm)				へら 記号	調整法及び特徴	時期	備 考
				①器高	②口径	③胴径	④底径				
1	杯 蓋	第10図 図版 9	焚口埋土下部	① 4.3	② 13.0			○	内外面ヨコナデ、天井部回転ヘラ削り 胎土は砂粒少く良好、焼成あまい、色調明灰色	B	
2	杯 蓋	第10図 図版 9	焚口埋土下部	① 4.2	② 12.2			○	内外面ヨコナデ、天井部ヘラ削り 胎土は砂粒を少し含む、焼成あまい、色調明灰色	B	
3	杯 蓋	第10図 図版 9	表土	① 4.8	② 13.3			○	内外面ヨコナデ、天井部ヘラ削り 胎土は大粒の砂粒を若干含む、焼成やや軟質、色調茶灰色	B	
4	杯 蓋	第10図 図版 9	焼成部上床半床	① 3.9	② 12.7				内外面ヨコナデ 胎土は砂粒少く良好、焼成良好 色調灰色	B	
5	蓋	第10図 図版 9	最下炭化層	① 4.9	② 12.8			○	内外面ヨコナデ、天井部ヘラ削り 胎土は砂粒を含む、焼成軟質 色調茶褐色	B	
6	杯 蓋	第10図 図版 9	最上床面	① 5.0	復元 ② 12.8			○	内外面ヨコナデ、天井部回転ヘラ削り 胎土は砂粒を若干含むがよい、焼成ややあまい、色調淡赤褐色	B	
7	高 杯	第10図 図版 9	窯体天井の上	① (4.3)	復元 ② 11.1				内外面ヨコナデ 胎土は細砂粒を若干含む、焼成軟質、色調黄色	B	
8	杯 身	第10図 図版 9	焚口埋土下部一括	① 4.5	② 10.5			○	内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 胎土は砂粒若干、焼成ややあまい、色調明灰色	B	
9	杯 身	第10図 図版 9	焚口埋土下部一括	① 4.1	② 10.9			○	内外面ヨコナデ、底部回転ヘラ削り 胎土は砂粒少い、焼成あまい、色調明灰色	B	
10	杯 身	第10図 図版 9	焚口埋土下部一括	① 4.0	② 10.4			○	内外面ヨコナデ、底部回転ヘラ削り 胎土は砂粒多い、焼成良好、色調灰色	B	
11	碗	第10図 図版 9	燃焼部最下床・焼成部黄色土層(第2床) N S トレンチ第1層(炭化物層) 炊口床上面炭化物層	① (9.4)	② 11.7			○	内面ヨコナデ、外面カキ目、底部欠損 胎土は細砂粒を若干含む、焼成軟質、色調茶黄色		
12	平 瓶	第10図 図版 9	最上床面	① (9.8)			④ 12.5		内面ヨコナデ、外面カキ目、底部未調整 胎土は小砂粒を若干含む、焼成硬質、色調暗灰色	Ⅲ	
13	壺	第10図	EWトレンチ最上床面	① (14.5)		③ 16.3			外面上半ヨコナデ、下半ヘラ削り口縁底部欠損 胎土は小砂粒を若干含む、焼成硬質、色調灰色	Ⅲ	
14	杯 蓋	第11図 図版 10	灰原炭化物層	① 5.1	② 13.6				内外面ヨコナデ、天井部回転ヘラ削り 胎土は砂粒少く良好、焼成あまい、色調黄褐色	A	
15	杯 蓋	第11図 図版 10	灰原炭化物層	① 5.3	② 12.9				内外面ヨコナデ、天井部ヘラ削り 胎土は砂粒を少量含む、焼成軟質、色調淡灰色	A	

遺物番号	器 種	挿図 図版番号	出土地点	法 量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ 記号	調整法及び特徴	時期	備 考
16	杯 蓋	第11図 図版10	EWトレンチ炭化物層	① 4.4 ② 13.4		内外面ヨコナデ、天井部回転ヘラ削り 胎土は砂粒含むがよい、焼成良色調淡赤褐色	B	
17	杯 蓋	第11図 図版10	灰原	① 3.9 ② 13.0	○	内外面ヨコナデ、天井部回転ヘラ削り 胎土は砂粒少い、焼成良好色調暗灰色	B	
18	杯 蓋	第11図 図版10	灰原炭化物層	① 4.1 ② 12.9	○	内外面ヨコナデ、天井部ヘラ削り 胎土は砂粒若干、焼成良好色調灰色	B	
19	杯 蓋	第11図 図版10	灰 原	① 4.1 ② 12.2		内外面ヨコナデ、天井部ヘラ削り 胎土は細砂粒を若干含む、焼成やや軟質、色調茶灰色	B	
20	杯 蓋	第11図 図版10	灰 原	① 3.5 ② 13.4	○	内外面ヨコナデ、天井部回転ヘラ削り 胎土は砂粒少い、焼成良好色調暗小豆色	B	
21	杯 蓋	第11図 図版10	灰原黄色土	①(3.4) ② 13.0		内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 胎土大粒砂粒若干、焼成良好色調淡灰色	B	
22	杯 蓋	第11図 図版10	灰 原	① 3.8 ② 11.9	○	天井部ヘラ削り 胎土は大粒の砂粒を少量含む、焼成硬質、色調黒灰色	B	
23	杯 蓋	第11図 図版10	灰原南地山上	① 3.3 ② 11.3	○	内外面ヨコナデ、天井部ヘラ削り 胎土砂粒若干、焼成硬質良好、色調暗灰色	C	
24	杯 身	第11図 図版10	灰 原	復元 ①(5.6) ② 13.3		内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 胎土砂粒若干、焼成やや良好色調小豆色	A	1/2欠損
25	杯 身	第11図 図版10	灰 原	①(4.8) ② 13.0		内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 胎土は砂粒を若干含む、焼成やや軟質、色調灰茶色	A	
26	杯 身	第11図 図版10	灰原炭化物層	① 4.4 ② 11.9		内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 胎土は砂粒を若干含む、焼成やや軟質、色調灰黄色	B	
27	杯 身	第11図 図版10	灰 原	① 4.4 ② 11.4		内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 胎土は砂粒少く良好、焼成良好色調灰色	B	
28	杯 身	第11図 図版11	灰 原	①(5.6) ② 10.1	○	内外面ヨコナデ、底部回転ヘラ削り 胎土は砂粒をあまり含まず良好、焼成良好、色調小豆色	B	
29	杯 身	第11図 図版11	灰 原	①(3.9) ② 10.6	○	内外面ヨコナデ、底部回転ヘラ削り、底部欠損 胎土は砂粒少く良好、焼成良好色調小豆色	B	
30	杯 身	第11図 図版11	灰 原	① 3.9 ② 11.2		内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 胎土は大粒の砂粒をわずかに含む、焼成硬質、色調(内…灰色外…小豆色がかった灰色)	B	
31	杯 身	第11図 図版11	灰 原	① 3.7 ② 11.8	○	内外面ヨコナデ、底部回転ヘラ削り 胎土は砂粒を若干含むがよい、焼成若干あまい、色調灰色	B	

遺物番号	器 種	挿図 図版	出土 地 点	法 量 (cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	へら 記号	調整法及び特徴	時期	備 考
32	杯 身	第11図 図版11	灰原炭化物層	① 4.1 ② 11.6		内外面ヨコナデ、底部へら削り 胎土は砂粒を含む、焼成あまり 良くない、色調淡灰色	B	
33	杯 身	第11図 図版11	灰 原	① 3.8 ② 11.0		内外面ヨコナデ、底部へら削り 胎土は砂粒を殆ど含まず良好、 焼成良好、色調暗灰色	B	
34	杯 身	第11図 図版11	灰 原	① 3.8 ② 11.8		内外面ヨコナデ、底部へら削り 胎土は砂粒をかなり含む、焼成 良好、色調暗灰色	B	
35	杯 身	第11図 図版11	灰 原	① 3.4 ② 11.4	○	内外面ヨコナデ、底部回転へら 削り 胎土は精選され良好、焼成良好 色調暗小豆色	B	
36	杯 身	第11図 図版11	灰原南地山上	① 3.3 ② 10.1	○	内外面ヨコナデ、底部へら削り 胎土は砂粒多い、焼成良好 色調灰色	C	
37	杯 身	第11図	灰原表土	① 4.2 ② 10.7		内外面ヨコナデ、底部へら削り 胎土は砂粒多い、焼成良好	C	1 / 4 欠損
38	杯 身	第11図	灰原南地山上	① 3.7 ② 10.0	○	内外面ヨコナデ、底部回転へら 削り 胎土は砂粒多い、焼成良好 色調灰色	C	
39	蓋	第11図 図版11	灰 原	①(3.5)		内面ヨコナデ、外面右廻りのカ キ目 胎土は砂粒多い、焼成良好 色調淡赤褐色	A	
40	杯 蓋	第11図 図版11	灰 原	復元 ① 5.3 ② 14.0		内外面ヨコナデ 胎土は砂粒を含む、焼成硬質で 良好、色調小豆色	A	1 / 2 欠損
41	杯 蓋	第12図 図版11	灰 原	① 5.4 ② 12.4		内外面ヨコナデ、天井部回転へ ら削り 胎土は砂粒少く良好、焼成あま い色調灰褐色	B	
42	杯 蓋	第12図 図版12	灰 原	① 5.3 ② 12.4		内外面ヨコナデ、天井部へら削り 胎土は大粒砂粒若干、焼成はあ まい、色調淡い茶褐色	B	
43	蓋	第12図 図版12	灰 原	復元 ① 4.9 ② 11.7		内外面ヨコナデ、天井部へら削り 胎土は小砂粒を若干含む、焼成 やや硬質、色調淡小豆色	B	
44	高 杯	第12図 図版12	灰 原	①(3.8) ② 12.5		杯内外面ヨコナデ、杯底部回転 へら削り。 胎土精選されている、焼成良好 色調(内…淡小豆色、外…灰色)	A	脚全欠
45	高 杯	第12図 図版12	灰 原	①(10.8) ② 12.4		杯内外面ヨコナデ、杯底部へら 削り、脚部ヨコナデ 胎土は砂粒若干、焼成硬質 色調(内…小豆色、外…暗灰色)	A	
46	高 杯	第12図 図版12	灰 原	①(11.1) ② 12.2	○	杯内外面ヨコナデ、脚部カキ目 胎土は砂粒を殆ど含まず精選さ れている 焼成良好 色調(内…小豆色、外…灰色)	A	
47	高 杯	第12図 図版12	灰 原	復元 ①(7.3) ② 13.9		杯部内外面ヨコナデ 胎土は砂粒を殆ど含まず、焼成 やや硬質 色調小豆色がかった灰色	B	

遺物番号	器 種	挿図 図版	出土地点	法 量(cm) ①器高 ②口徑 ③胴径 ④底径	ヘラ 記号	調整法及び特徴	時期	備 考
48	高 杯	第12図	灰 原	①(12.2) ② 12.0		杯内外面ヨコナデ、杯底部ヘラ削り。 胎土は砂粒を殆ど含まず、焼成硬質良好、色調灰色	B	脚部欠損
49	高 杯 脚	第12図 図版12	灰 原	①(7.4) 復元 ④ 15.7		内外面ヨコナデ 胎土は砂粒を若干含む、焼成硬質、色調灰黒色	B	
50	高 杯	第12図	灰 原	①(4.5) 復元 ② 13.6		杯内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り。 胎土は砂粒若干、焼成良好、色調淡赤褐色	A	脚部全欠
51	高 杯	第12図	灰 原	①(4.5) ② 12.1		杯内外面ヨコナデ、外面に一部刺突文あり。 胎土は砂粒を若干含む、焼成硬質、色調(内…小豆色がかった灰色、外…暗灰色)	B	脚全欠
52	高 杯	第12図 図版12	灰 原	①(4.9) 復元 ② 12.8		内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 胎土は小砂粒を若干含む、焼成硬質、色調灰色	B	脚部全欠
53	高 杯	第12図 図版12	灰 原	① 15.4 復元 ② 11.4 ④ 10.4	○	杯内外面ヨコナデ 胎土は砂粒を若干含む、焼成硬質、色調灰色	B	
54	高杯脚部	第12図 図版13	灰 原	①(11.2) 復元 ④ 14.0		内外面ヨコナデ 胎土は砂粒を若干含む、焼成硬質、色調灰色	B	
55	高 杯	第12図 図版13	灰 原	① 14.6 ④ 14.1		外面ヨコナデ、脚部のみ 胎土は小砂粒を若干含む、焼成やや硬質、色調灰色	A	
56	高 杯	第12図 図版13	灰 原	① 9.5 復元 ② 9.0 ④ 8.1		杯部内外面ヨコナデ、脚部もヨコナデ？ 胎土は砂粒を多く含む、焼成硬質、色調灰黒色	C	
57	高 杯 脚	第12図 図版13	灰 原	① 7.0 ④ 9.9		内外部ヨコナデ 胎土は砂粒を殆ど含まず、焼成やや軟質、色調灰褐色	B	
58	高 杯 脚	第12図 図版13	灰 原	①(7.1) 復元 ④ 9.4		内外面ヨコナデ 胎土は細砂粒わずかに含む、焼成やや軟質、色調灰色	B	
59	高 杯	第12図 図版13	灰 原	①(7.5) 復元 ④ 11.9		内外面ヨコナデ 胎土は砂粒を殆ど含まない、焼成硬質、色調(内…暗灰色、外…灰色)	B	
60	碗	第13図 図版13	灰原EWトレンチ	① 6.4 復元 ② 11.1		内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 胎土は砂粒を若干含む、焼成硬質、色調(内…灰色、外…小豆色)	A	
61	碗	第13図 図版13	灰 原	① 6.1 復元 ② 12.3		内外面ヨコナデ、底部ヘラ削り 半分欠損 胎土は砂粒若干、焼成良好、色調淡赤褐色	A	
62	碗	第13図 図版13	灰 原	① 8.5 ② 11.9	○	内面ヨコナデ、外面上部カキ目とヨコナデ、底部同転ヘラ削り 胎土は砂粒をかなり含む、焼成ややあまい、色調明灰色	B	
63	碗	第13図 図版14	灰 原	① 10.0 復元 ② 8.3		内面ヨコナデ、外面上半部カキ目、下半部カキ目の上、ヘラ削り 胎土は砂粒を若干含む、焼成やや硬質、色調小豆色	B	

遺物番号	器 種	挿図 図版	出 土 地 点	法 量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	へら 記号	調整法及び特徴	時期	備 考
64	卍 蓋	第13図 図版13	灰 原	① 3.1 ② 8.0	○	内外面ヨコナデ、天井部回転へら削り 胎土は砂粒含む、焼成良好 色調暗灰色	A	
65	小 形 壺	第13図 図版14	最上床面	①(7.6)		内外面ヨコナデ、底部へら削り 胎土は若干砂粒含む、焼成良好 色調暗灰色	B	
66	台 付 壺	第13図 図版14	灰 原	①(6.6)		内面ナデ、外面ヨコナデとカキ目 胎土砂粒若干、焼成軟質 色調黄褐色	B	
67	脚	第13図 図版14	灰 原	①(3.5) ④ 8.9	○	内外面ヨコナデ 胎土は細砂粒をわずかに含む 焼成軟質、色調淡い小豆色	C	
68	脚 台	第13図 図版14	灰 原	①(6.8) ④ 13.9		内外面ヨコナデ 胎土は砂粒を若干含む、焼成硬質、色調灰色	A	
69	瓶	第13図	灰 原	①(9.1) ② 11.0		内面ヨコナデ、外面口縁部ヨコナデ、頸部カキ目 胎土は砂粒含む、焼成硬質 色調暗灰色	B	
70	摺 鉢	第13図	灰 原	① 8.8		内面ヨコナデ、外面カキ目 1/3のみ残存 胎土は砂粒若干、焼成良好 色調灰色	B C	
71	平版口縁	第13図 図版14	灰 原	①(5.9) ② 7.8		内外面ヨコナデ 胎土は砂粒若干含むが良好 焼成良好、色調暗灰色	C D	
72	提 瓶	第13図 図版14	灰 原	①(15.5)		外面カキ目 胎土は砂粒を若干含む 焼成硬質、色調暗灰色	C	
73	提 瓶	第13図 図版14	灰 原	復元 ① 18.5 ② 6.4		全面に補修のため調整法不明 胎土は砂粒を若干含む 焼成硬質、色調灰色	C	
74	壺	第14図 図版14	灰 原	①(12.0) ④ 15.7		内面ヨコナデ、外面カキ目状の線が入る 胎土砂粒を含む、焼成硬質 色調暗灰色		
75	直 口 壺	第14図 図版15	灰 原	①(8.5) ② 11.6 ③ 25.5		胎土は砂粒を若干含む 焼成やや硬質、色調灰色		
76	雙 口 縁	第14図	灰 原	復元 ①(5.8) ② 19.6		口縁内外面ヨコナデ、肩部内面同心円叩き、外面格子叩き、銘欠損 胎土は砂粒を含む、焼成軟質、色調淡い茶灰色		
77	中雙口縁	第14図 図版15	灰 原	①(8.9) ② 18.8		口縁内外面ヨコナデ、肩部内面同心円叩き、外面格子目状叩き、胎土は砂粒を若干含む、焼成硬質、色調灰色		
78	中雙口縁	第14図 図版15	灰 原	①(8.4) ② 20.5		口縁内外面ヨコナデ、肩部内面粗い同心円叩き、外面格子平行叩き、胎土は砂粒を若干含む、焼成軟質、色調茶灰色		
79	小 雙	第14図 図版15	灰原炭化物層	①(9.0) ② 15.7		口縁内外面ヨコナデ、肩部内面同心円叩き、外面格子状叩き、胎土は砂粒を若干含む、焼成軟質、色調淡黄色		

遺物番号	器 種	挿図 図版番号	出土地点	法 量(cm)				へら 記号	調整法及び特徴	時期	備 考
				①器高	②口径	③胴径	④底径				
80	甕口縁	第14図 図版15	灰 原	①(8.4)	② 20.4				口縁内外面ヨコナデ、肩部内面同心円叩き、外面格子目叩き、胎土は砂粒を若干含む、焼成硬質、色調灰色		
81	中 甕	第14図 図版15	灰 原	①(7.3)	② 20.3				口縁部内外面ヨコナデ、肩部外面平行タタキ、内面同心円タタキ、胎土は砂粒を若干含む、焼成硬質、色調(内面)暗灰色(外面)灰色		
82	中 甕	第14図 図版15	灰 原	①(9.3)	② 22.4				口縁内面ヨコナデ、外面カキ目、肩部内面同心円タタキ、胎土は砂粒を若干含む、焼成硬質、色調灰色		
83	甕口縁	第15図	灰 原	①(8.0)	② 32.7	復元			口縁内外面ヨコナデ 3/4欠損 胎土は砂粒含む 焼成硬質、色調明灰色		
84	甕口縁	第15図 図版15	灰口床面上炭化物層	①(19.8)	② 42.0				胎土は砂粒を若干含む 焼成硬質、色調灰色		

2 瓦 類

2号窯の焼成部第1次床面上から軒丸瓦が出土した。また窯内崩壊土堆積層中からも数点出土している。これらは、窯天井部が崩壊した際、表土上にあつたため流れ込んだものと考えられる。以下軒丸瓦・丸瓦・平瓦について記す。

軒丸瓦 (第20図・図版16・17)

2号窯跡焼成部の床面から出土した。

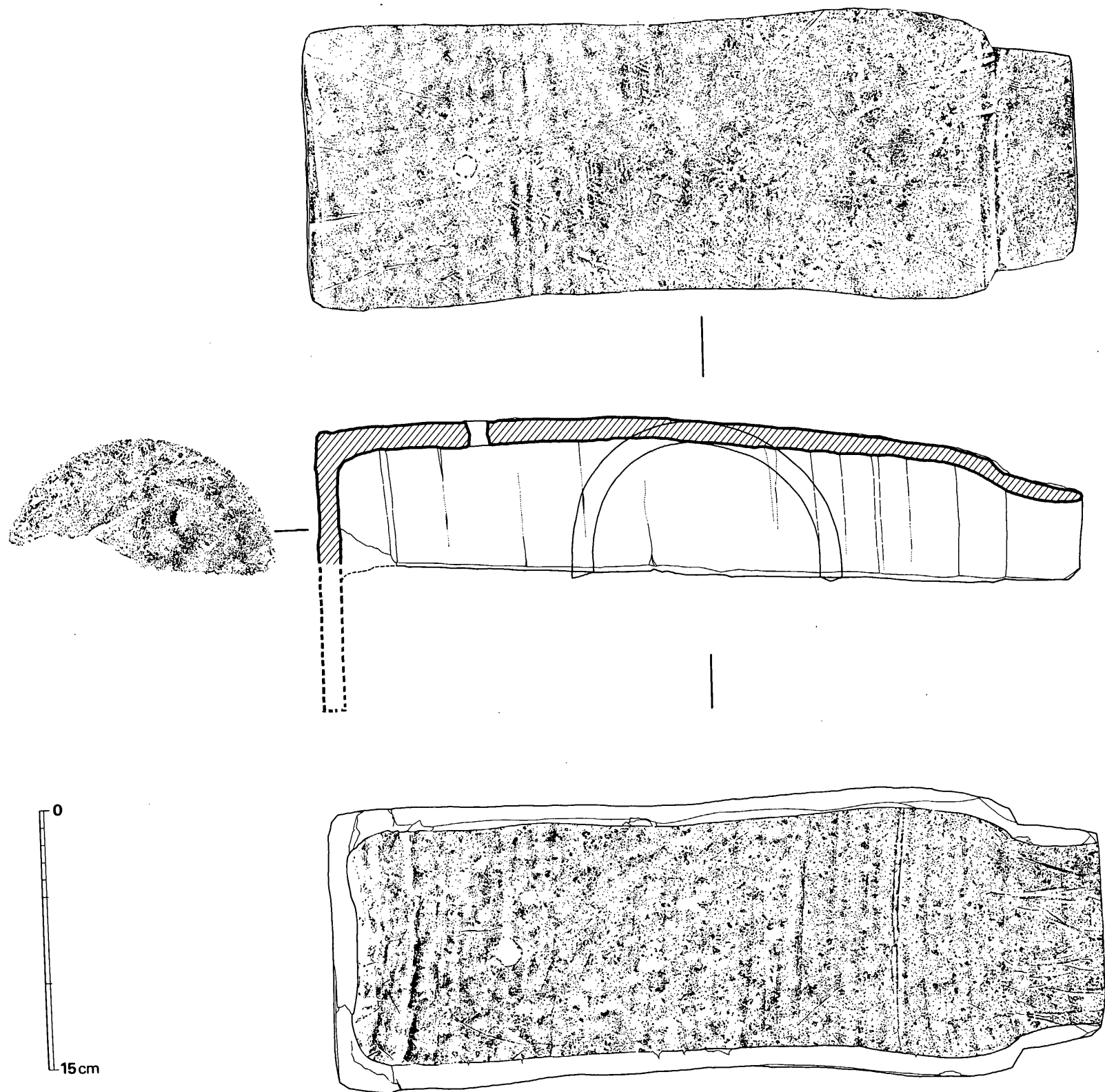
全長44.1cmで瓦当は無文で下半部は欠失している。直径15.7cm、瓦当厚は中心部で1.4cmである。瓦当面はナデ調整を行い、周縁が若干高くなるが判然とはしない。裏面はナデによって丁寧に調整されている。

丸瓦は全体的に焼け歪んでいるが、丸瓦上面は瓦当面から玉縁部にかけてゆるやかにカーブしている。

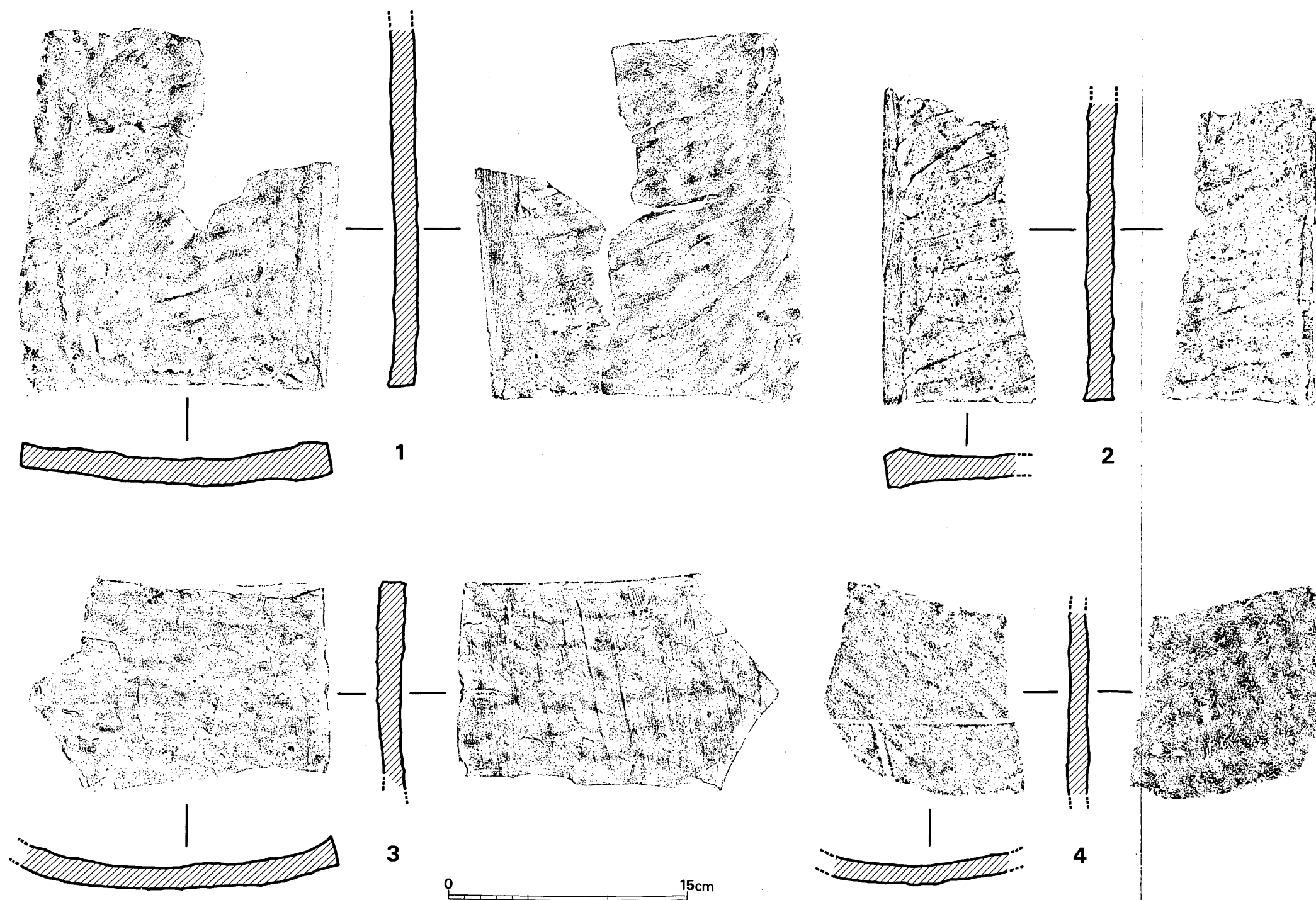
また瓦当面から9.2cmのところに径0.8cmの釘穴が穿たれている。凸面部は細かな格子目の叩き(0.3×0.3cm)のあと横方向のハケ目調整によって仕上げている。瓦当面と釘穴の間は縦方向に指ナデ調整を行っている。この凸面部には全体に砂が焼きついており焼台に使用されたものであろう。凹面は全体に強い横方向のナデ調整のため、一部に粘土紐らしき痕跡が認められるほかは成形、調整に関する痕跡は一切不明である。側縁は丁寧なヘラケズリによって仕上げている。

玉縁は丸瓦体部から斜めに段がつき、約0.8cmで比較的低い。凹凸面ともヨコナデによって丁寧に調整されている。端部は丸く仕上げられており、通常の丸瓦とは異つたものであり、土器の口縁を思わせる特徴的なものである。胎土は荒い砂粒をかなり多く含み、焼成は堅緻である。

丸・平瓦 (第21図・図版18)



第20図 2号窯跡出土軒九瓦（縮尺1／3）



第21図 2号窯跡出土平瓦実測図・拓影（縮尺1／3）

焼成部、燃烧部、灰原などから主に出土したが、量的に少く、かつすべて破片であり完全な形に復元し得るものは丸・平瓦ともない。出土点数は丸瓦10点、平瓦45点である。

丸瓦は軒丸瓦と同じ技法によったと考えられるが、最後の仕上げ調整の有無によって2種類に分類できる。ひとつは軒丸瓦と全く同様のもので、凸面は格子目の叩きのあとハケ目によって仕上げ、凹面は強いヨコナデによるものであり、他は凸面が格子目による叩きのままである。また凹面はランダムなナデによるのみで、粘土紐の痕跡が顕著に残っているものがある。

平瓦は全体的に薄手で厚さは1.0～1.5cmである。全形を知り得るものはないが、素材の取り方で粘土板らしきものによるものと粘土紐によるものがある。第21図-1・2は比較的全体を知り得るもので、幅19.8cm、現存長22.5cm、厚さ 1.5cmである。粘土板とはかなり趣きを異にしており、糸切りなどの痕跡は全く認められない。素材の取り方は明らかでないが、粘土塊を方形の板状に延ばしたのち、両面とも指ナデによって調整を行い、両端部および両側縁をヘラケズリ、指ナデによって調整したものと考えられる。片方の側縁が肥厚した部分はヘラケズリにより調整している。全体的にゆがんでいる。2も同様の技法によったもので両面とも強い横方向のナデが認められ、肥厚した側縁をヘラケズリ調整している。この他凸面をハケ目によって仕上げているものもある。3は粘土紐によるもので、粘土紐は1.8～2.1cmぐらいのものを巻上げている。凸面は叩きの痕跡は全く認められず、ハケ状工具によって縦方向に調整のあと、さらに全面にわたって指ナデにより仕上げている。凹面は粘土紐の痕跡が顕著に残っているが模骨らしき痕跡は認められない。側縁および端部はヘラナデによって丁寧に仕上げている。胎土は荒い砂粒を多く含むものとほとんど砂粒を含まない精製されたものがある。

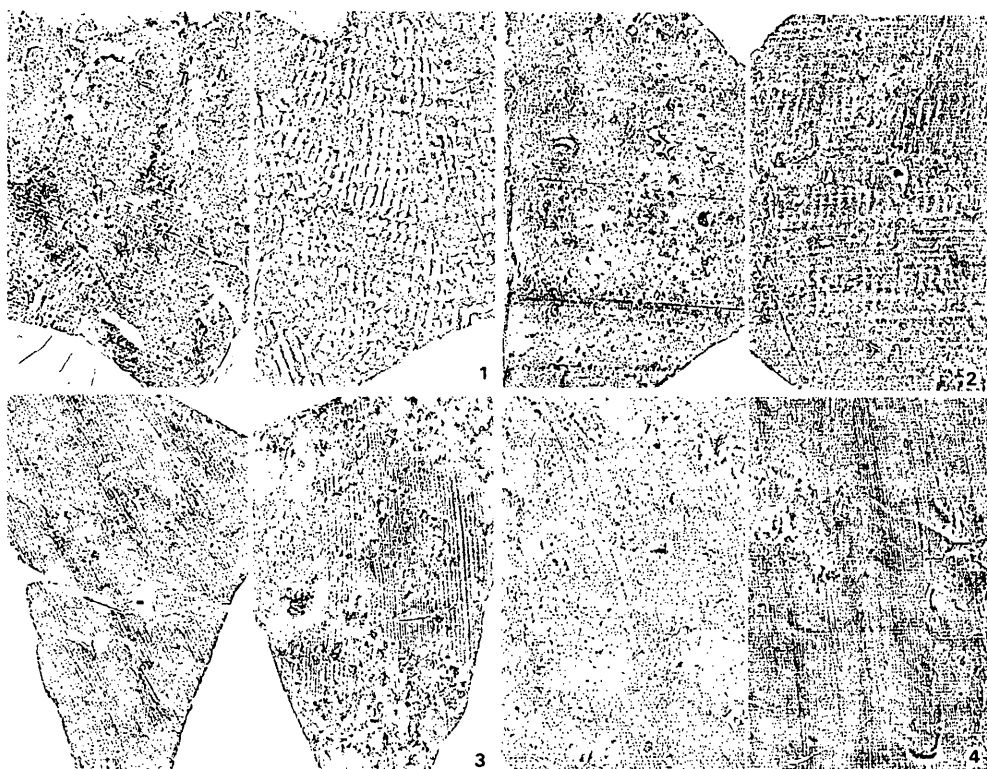
以上各々の細部の特徴などを記してきた。そこで軒丸瓦の製作技法をあらためて考えてみたい。瓦当部から玉縁の間に幅3.5～4.0cmの間隔をもって、粘土紐の痕跡が数箇所認められる。このことから軒丸瓦を作る場合、まず円形の粘土板をおき、粘土紐を巻き上げる。そして凸面を格子目叩き具で叩きしめ、ハケ目およびナデによって調整する。次いで土管形の円筒を半裁し、瓦当と丸瓦を接合する。ヘラケズリ調整を行う。これら一連の作業は土器の製作と同様にロクロないしは回転台を使用したと考えられる。

以上おおまかな手順を考えてみたが、製作時はもっと細かい手法が加えられるものと思われる。瓦当と丸瓦の接合部を観察すると凹面に貼付する粘土は薄く、その角度はほぼ直角に近い。又、丸瓦の両側端は中央部で狭くなっており、粘度紐巻上げ技法から生ずるゆがみではないかと考えられる。また、瓦当と丸瓦の接続部の形態は畿内飛鳥寺の軒丸瓦と類似しているが、本例は模骨や成形台を使用しておらずこれまでの瓦の製作技法とは異った、むしろ土器（甕や壺）の製作技法に近いようであり、きわめて注目すべき瓦であるといえる。

これまでに窯跡および寺院跡などから、いわゆる須恵質の初期的な瓦が発見されている。なかでも大浦2号窯跡は須恵器と共に丸・平瓦が出土し、凸面に平行線文、凹面は同心円文および布目痕が残り、模骨製作技法によって作られている。時期は6世紀末から7世紀前半頃とされ、九州における瓦の初現を提示された。今回出土のそれは大浦2号窯跡出土の瓦に比べて、技法的にも異り、又伴出した須恵器は大浦出土の須恵器より^(註1) 時期的に若干遡るものと考えられる。このように今回出土の瓦は製作技法およびその製作時期について従来の瓦に対する考え方

では律しきれない点が多く、今後の資料の増加をまつとともにさらに検討を加えていきたい。

註1. 福岡県教育委員会「野添・大浦窯跡群」福岡県文化財調査報告書 第43集 1970



第22図 平瓦細部拓影（縮尺1／2）

Ⅳ ま と め

確認された事項は以下のとおりである。

1. 遺跡は牛頸古窯跡群の東北端に位置する。
2. 丘陵尾根を挟んだ南北に2基の窯が確認された。
3. 1号窯はS14°Eの焚口方向をもつ地下式窯で、残存長7.6m、第1次床面の焼成部傾斜角は33°である。3次にわたり改修があり、4枚の床面間の堆積層は厚い。操業期間の長さを物語っている。
4. 2号窯はN26°Wの焚口方向をもつ地下式窯で、残存長は12.0m、第1次床面の焼成部傾斜角は30°である。2回の改修があり、3次の床面間の堆積層は薄い。操業期間の短かさを物語っている。
5. 1号窯からはC類が大半を占める須恵器が出土した。2号窯からはB類が大半を占める須恵器と瓦が出土した。

年代について

北部九州における従来からの型式からいえば、A～D類はⅢB～V型式に相当する。しかし各類をどの型式に充当させるかについては研究者間に相違点があり、私見としてA=ⅢB、B=ⅣA、C=ⅣB、D=Vと基本的に考え、B類の細部のうちBa類までⅢB型式に充当する可能性を保留した。

Ba類は陶邑における中村浩氏のⅡ型式第4段階、田辺昭三氏のTK43型式に、Bb類は同様にⅡ型式第5段階、TK209に概ね充当し、小墾田宮跡SD050出土品中の最新型式である藤原B類に最も近い。

藤原B類は「飛鳥寺創建以前の飛鳥寺下層型式の直後にくる型式で、…存続時期はAD 600年を大きく隔らないところ」と^註されている。この年代観を演繹するならば1号窯の操業の時期はAD 600～650の間、2号窯はAD 600年以前となる。

2号窯出土の瓦製作時期について

第1次床面から出土した軒丸瓦の表面叩きは第19図11の叩きと同様同種である。11の甕片は第10図7の杯身及び第21図平瓦と共伴している。この杯身はBa類である。よって当窯出土瓦は現段階ではAD 600年を遡ると考える。

註 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告書Ⅰ」1976

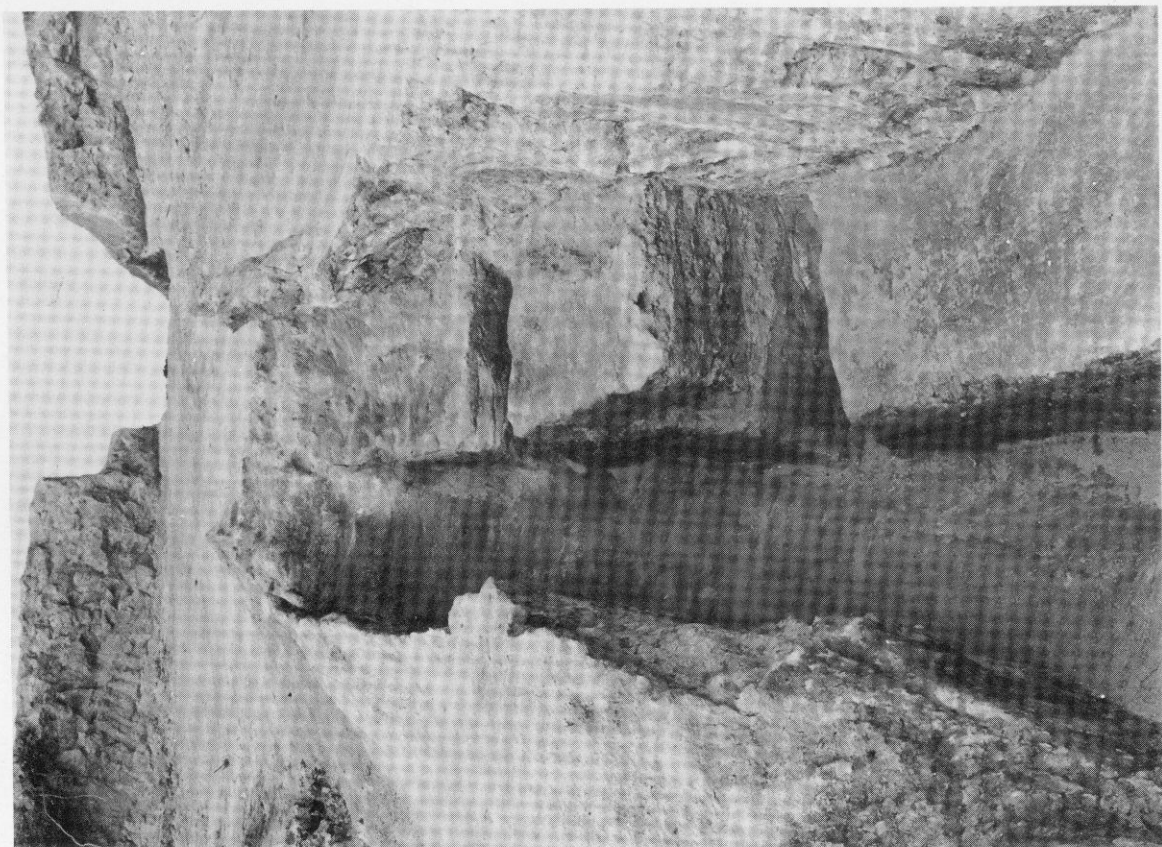
版 図



(1) 窯跡遠景

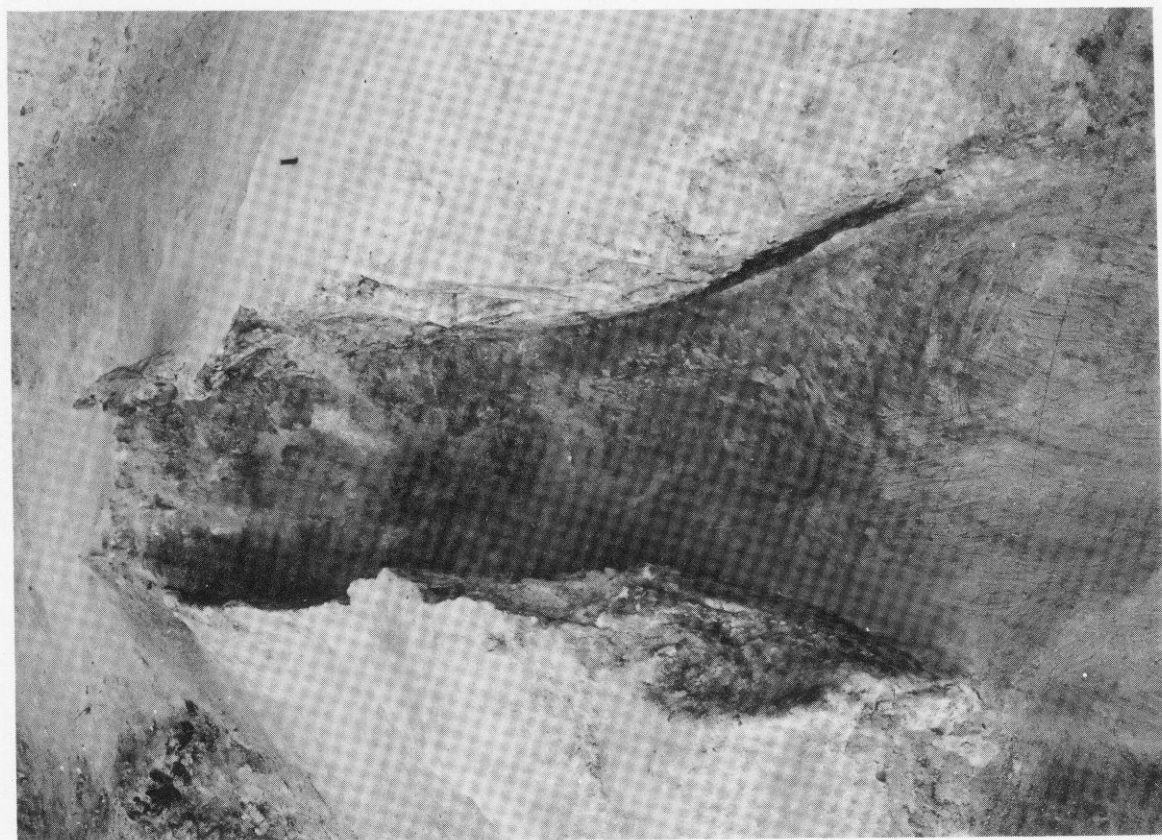


(2) 調査前の1号窯



(右) 1号煤各床面断面

(左) 1号煤全貌

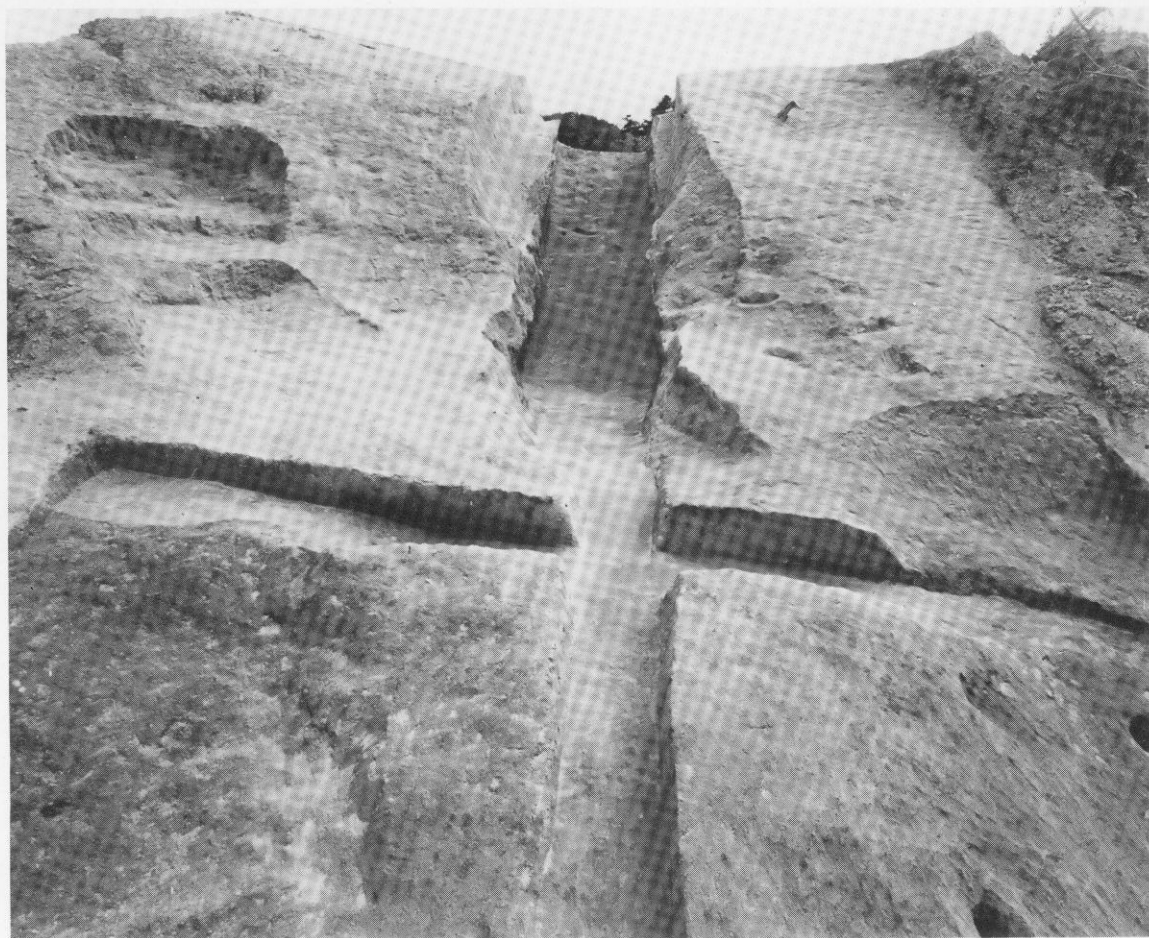




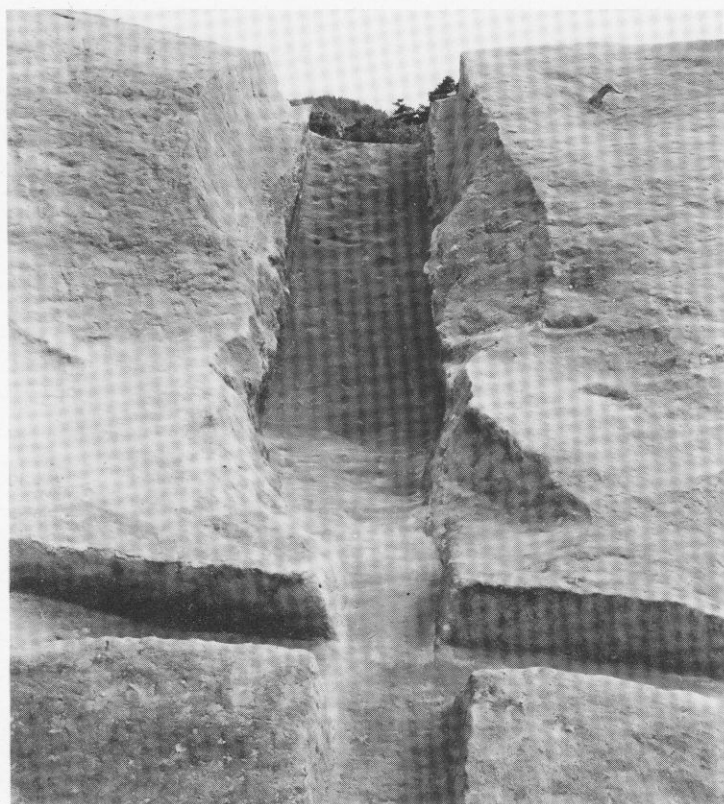
(1) 調査前の2号窯



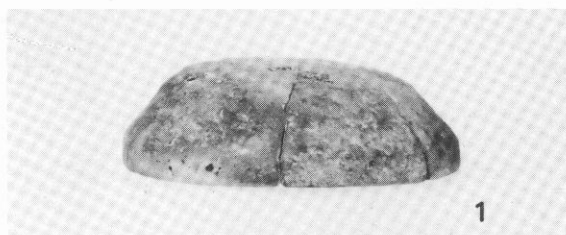
(2) 天井部残存時の2号窯全景



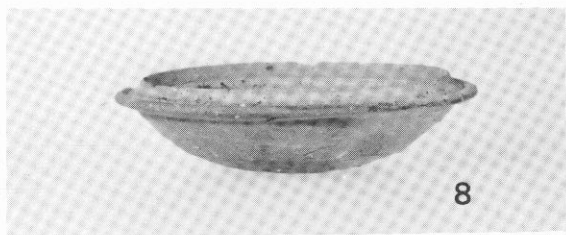
(1) 2号窯と灰原全景



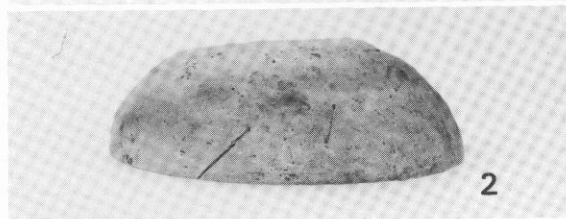
(2) 2号窯全景



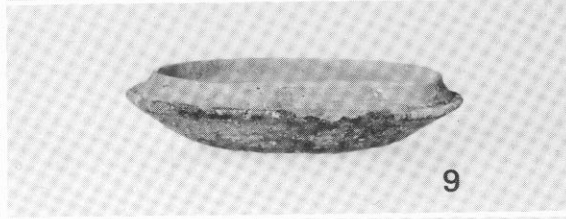
1



8



2



9



3



10



4



11



5



12



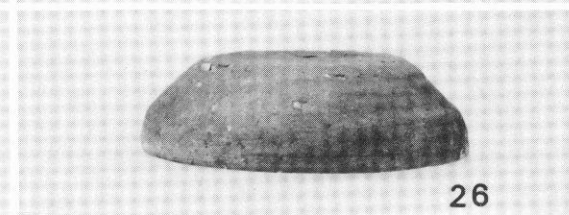
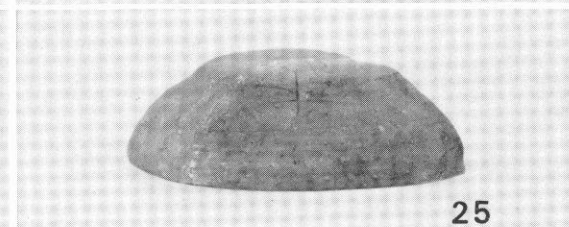
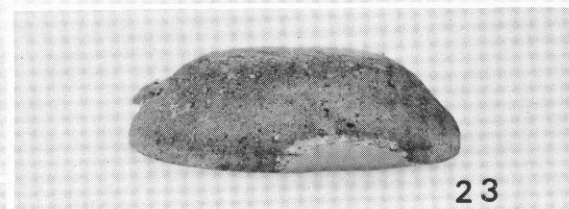
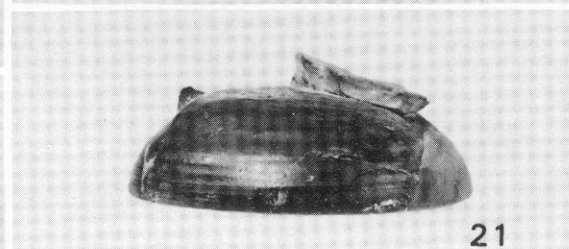
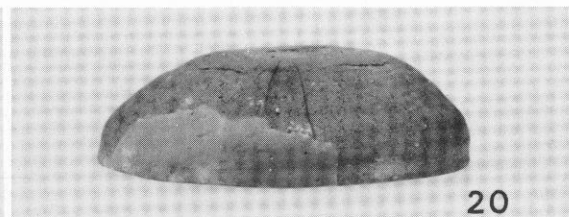
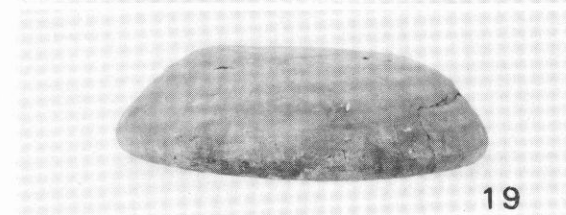
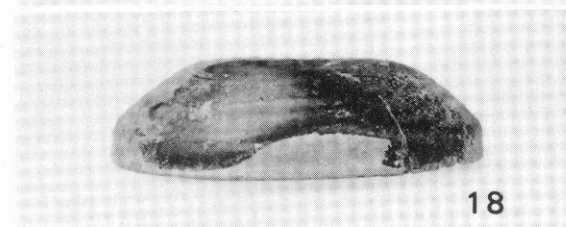
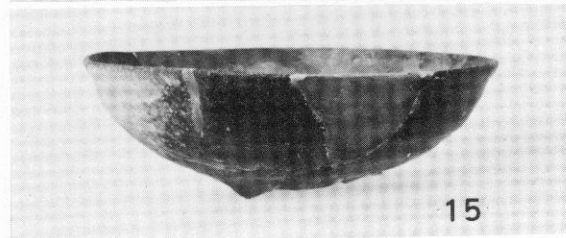
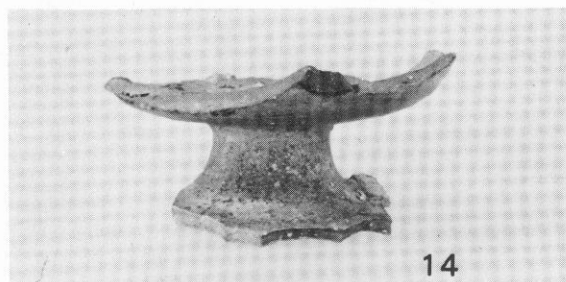
6

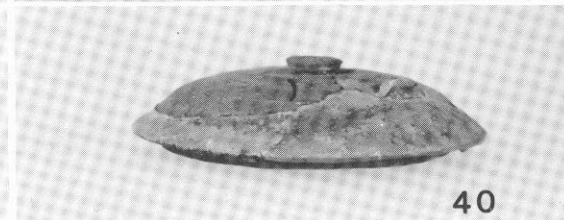
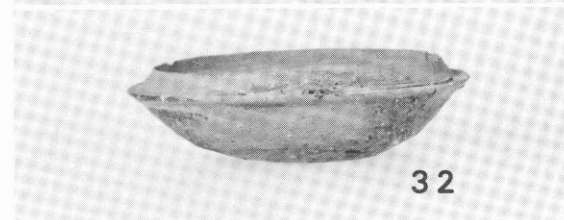
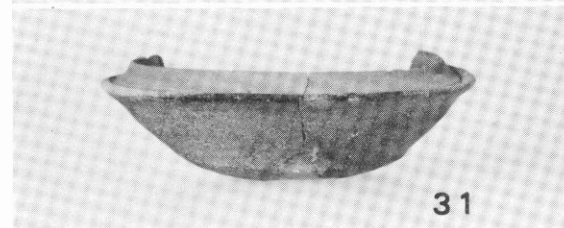
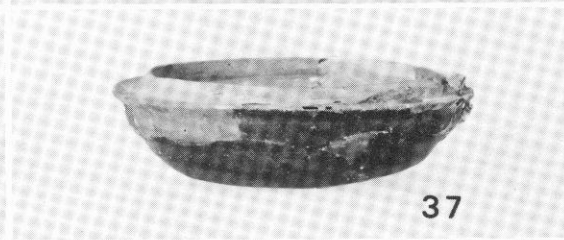
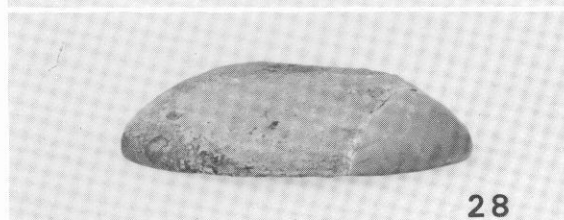
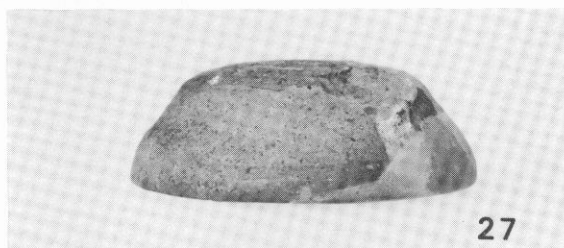


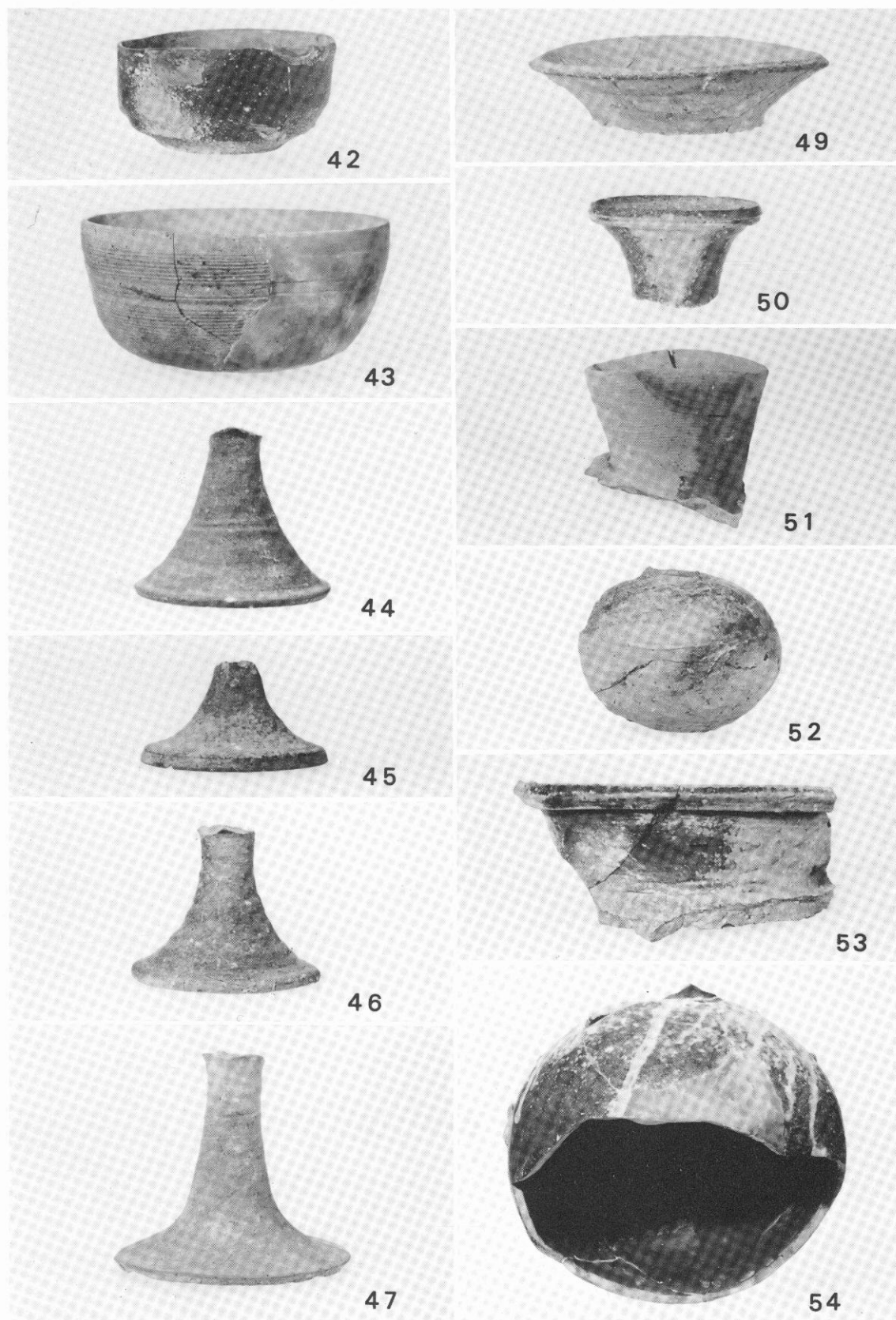
13



7



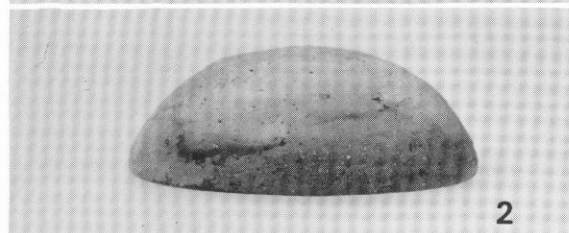




1号窯出土須恵器④



1



2



3



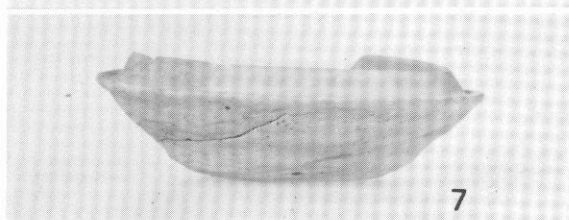
4



5



6



7



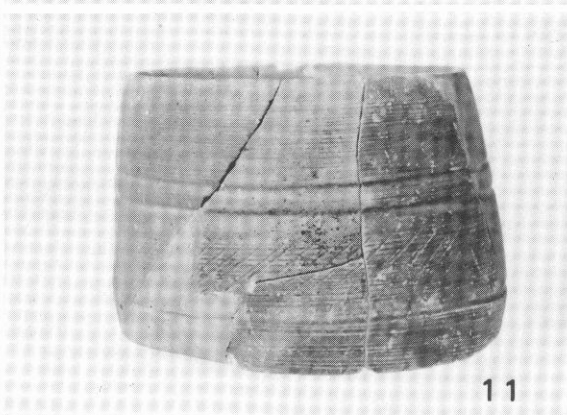
8



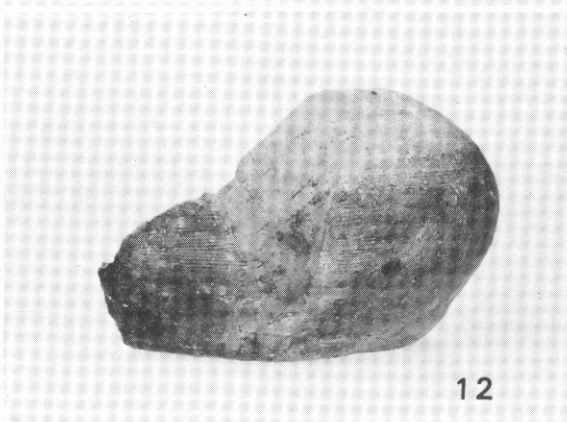
9



10



11



12



14



21



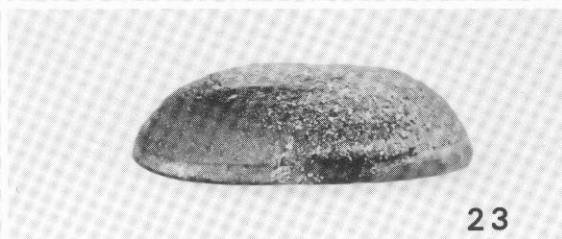
15



22



16



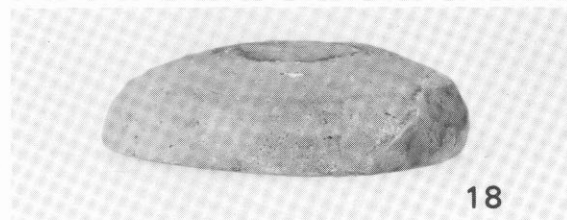
23



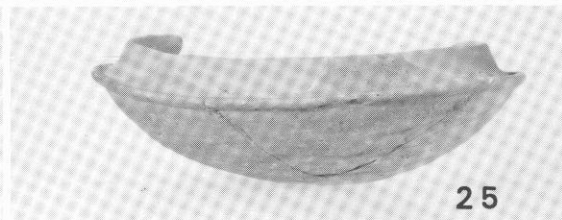
17



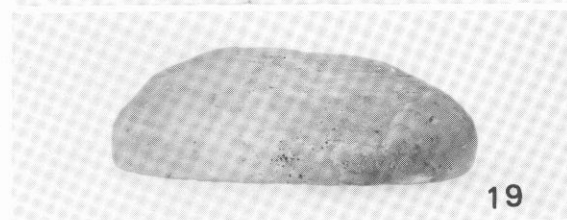
24



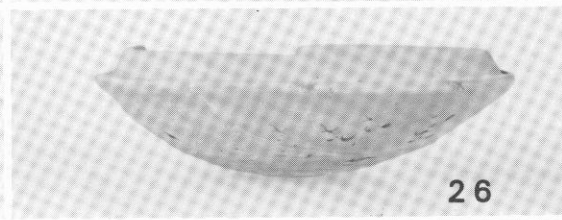
18



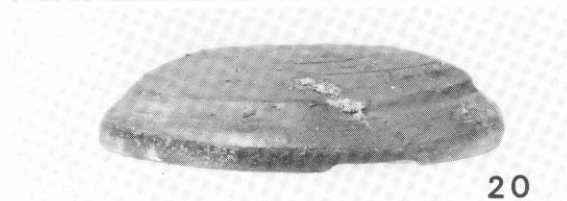
25



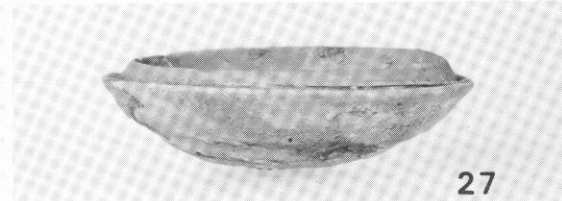
19



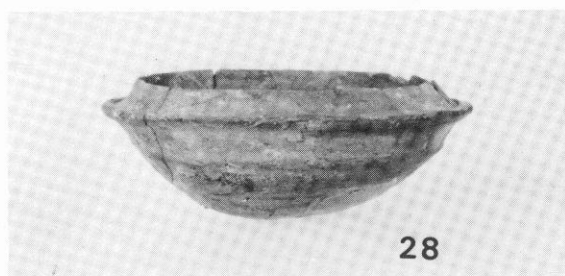
26



20



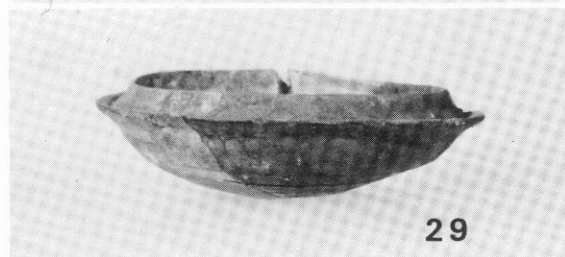
27



28



34



29



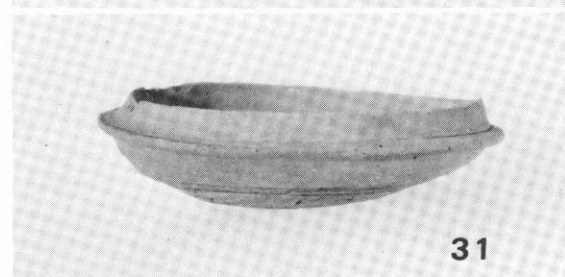
35



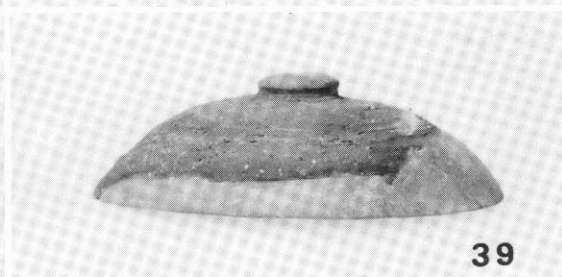
30



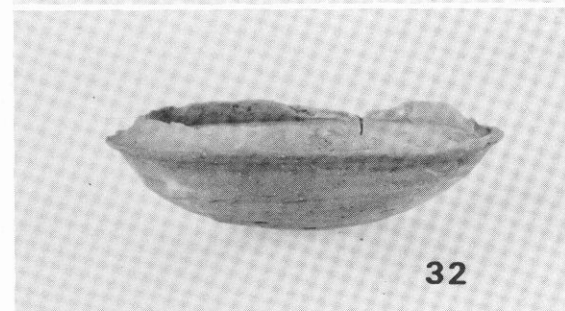
36



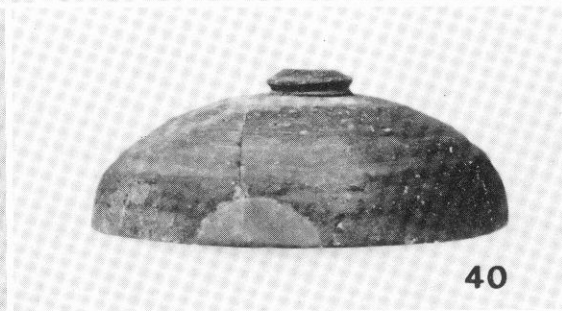
31



39



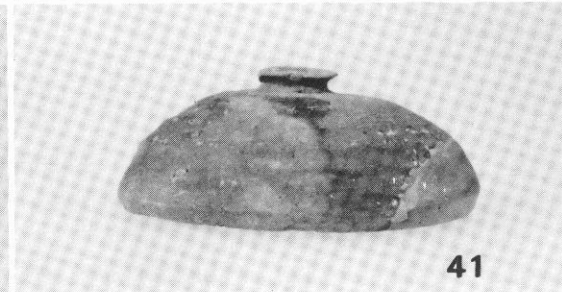
32



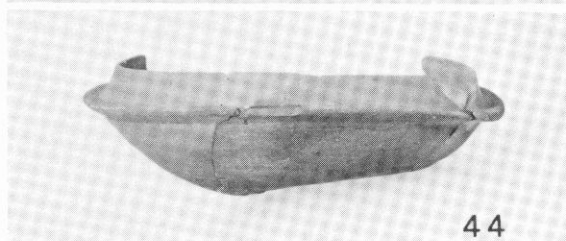
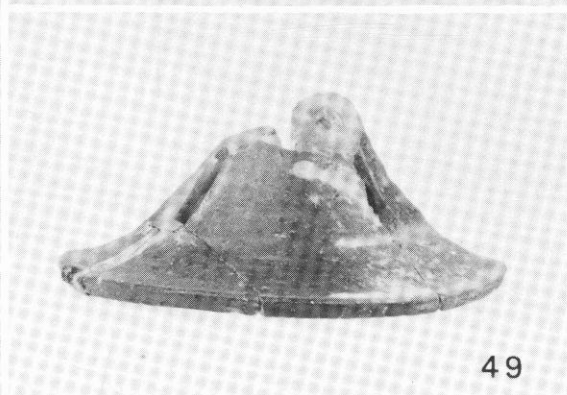
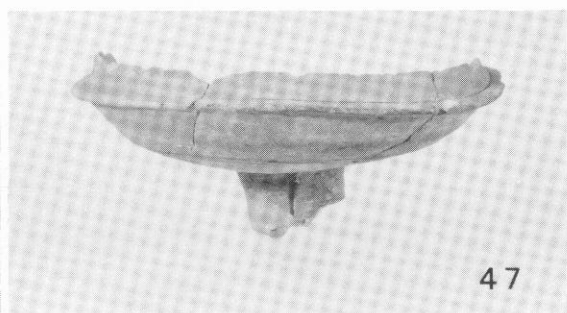
40

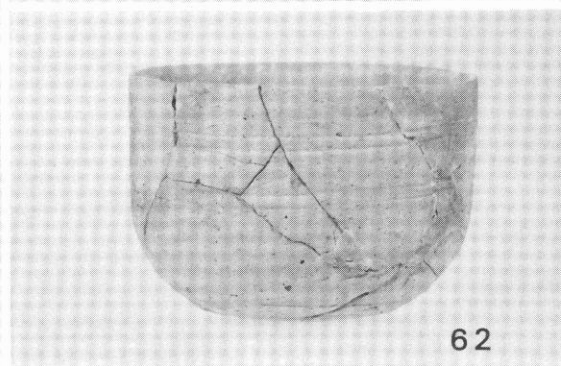
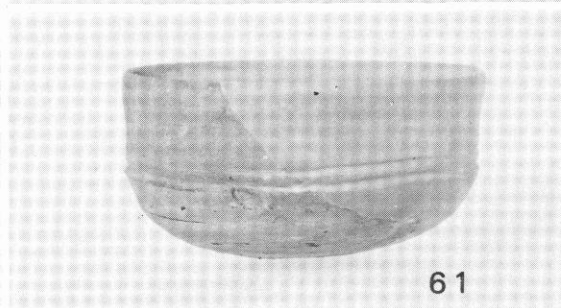
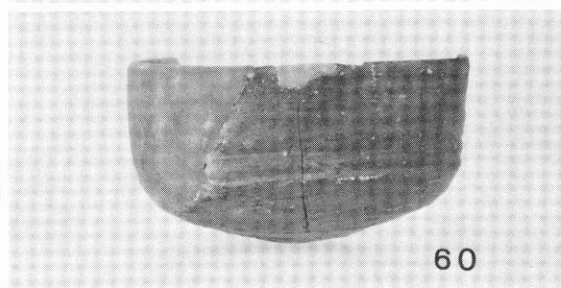
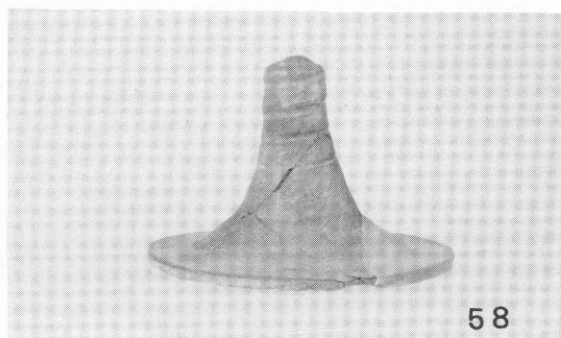
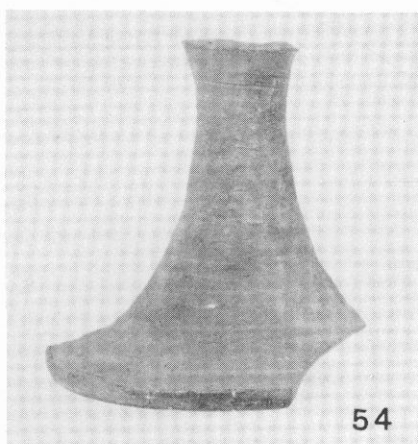


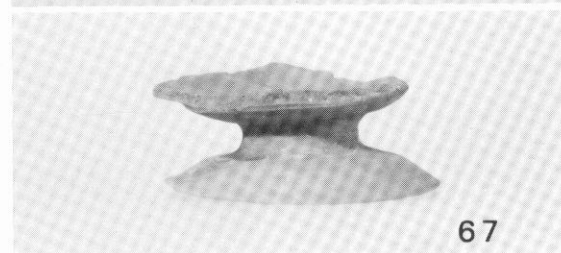
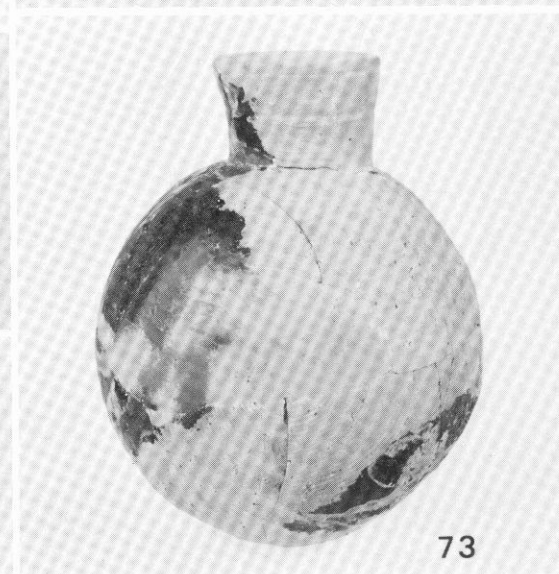
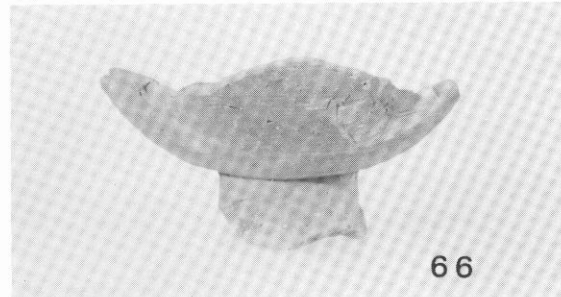
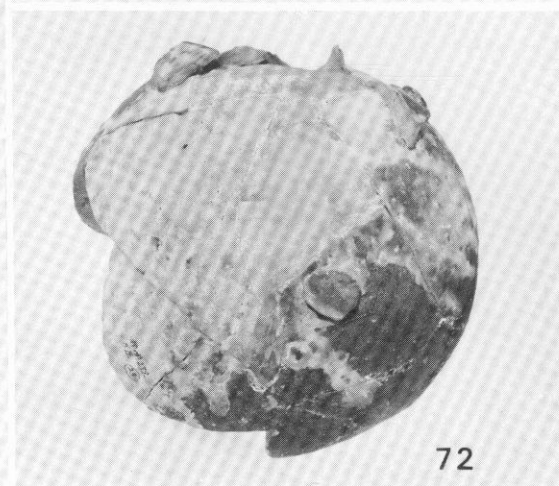
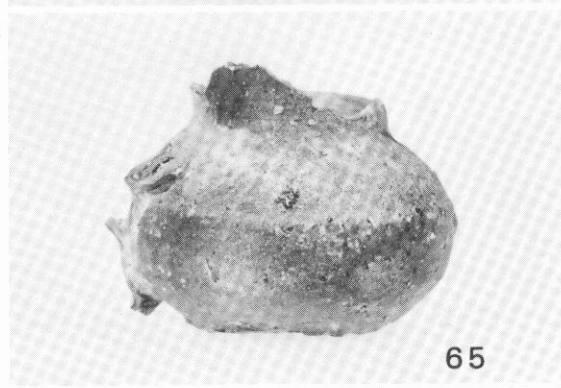
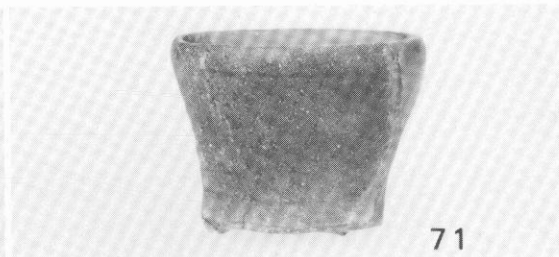
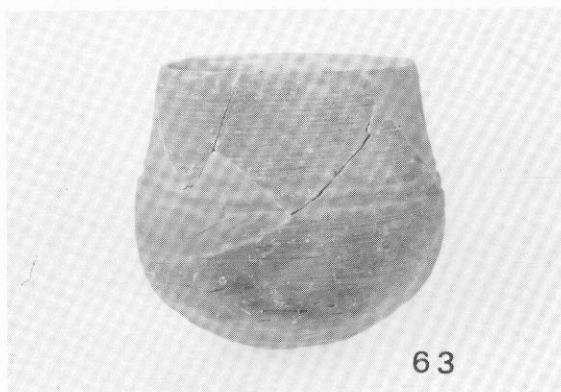
33

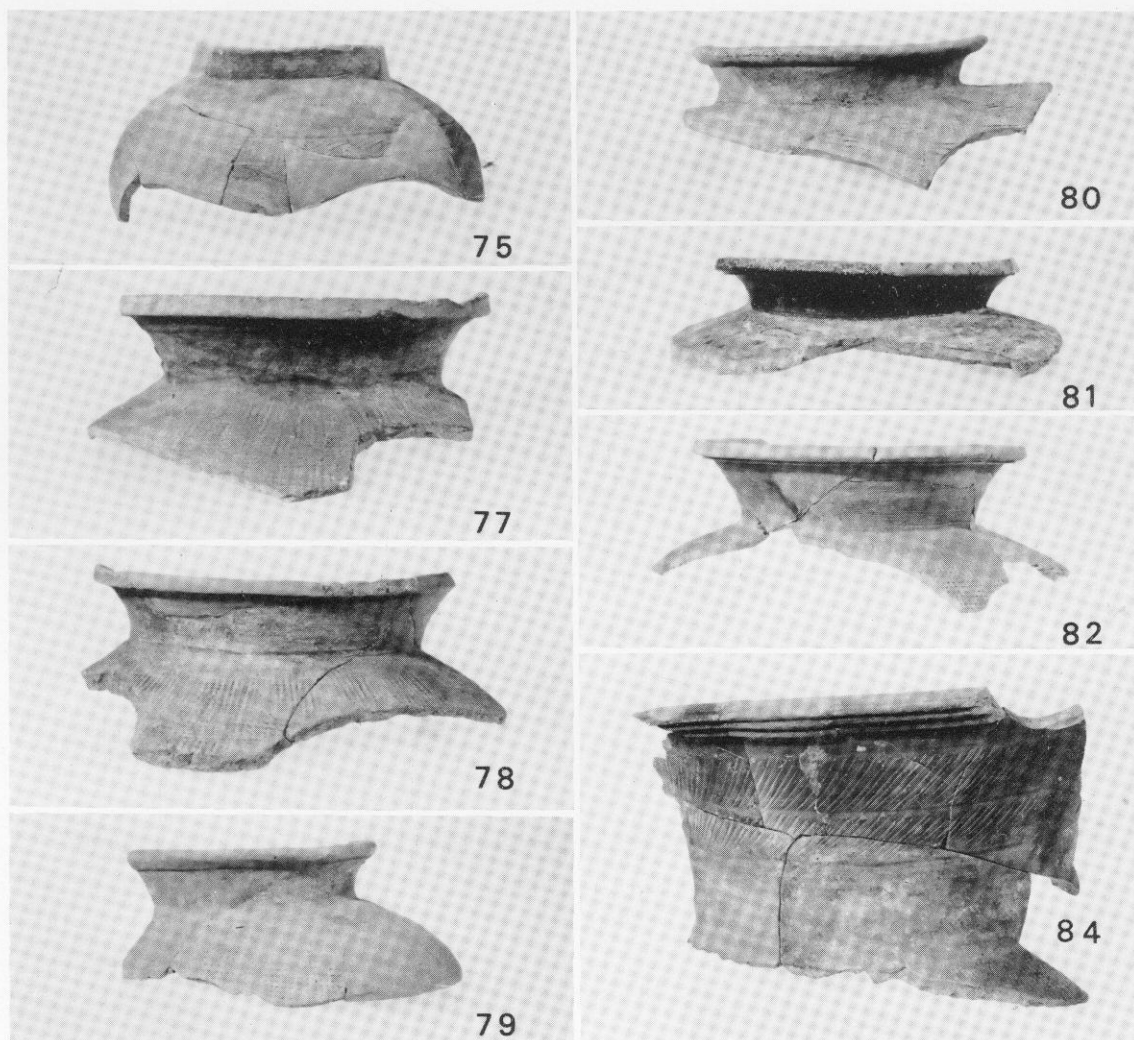


41







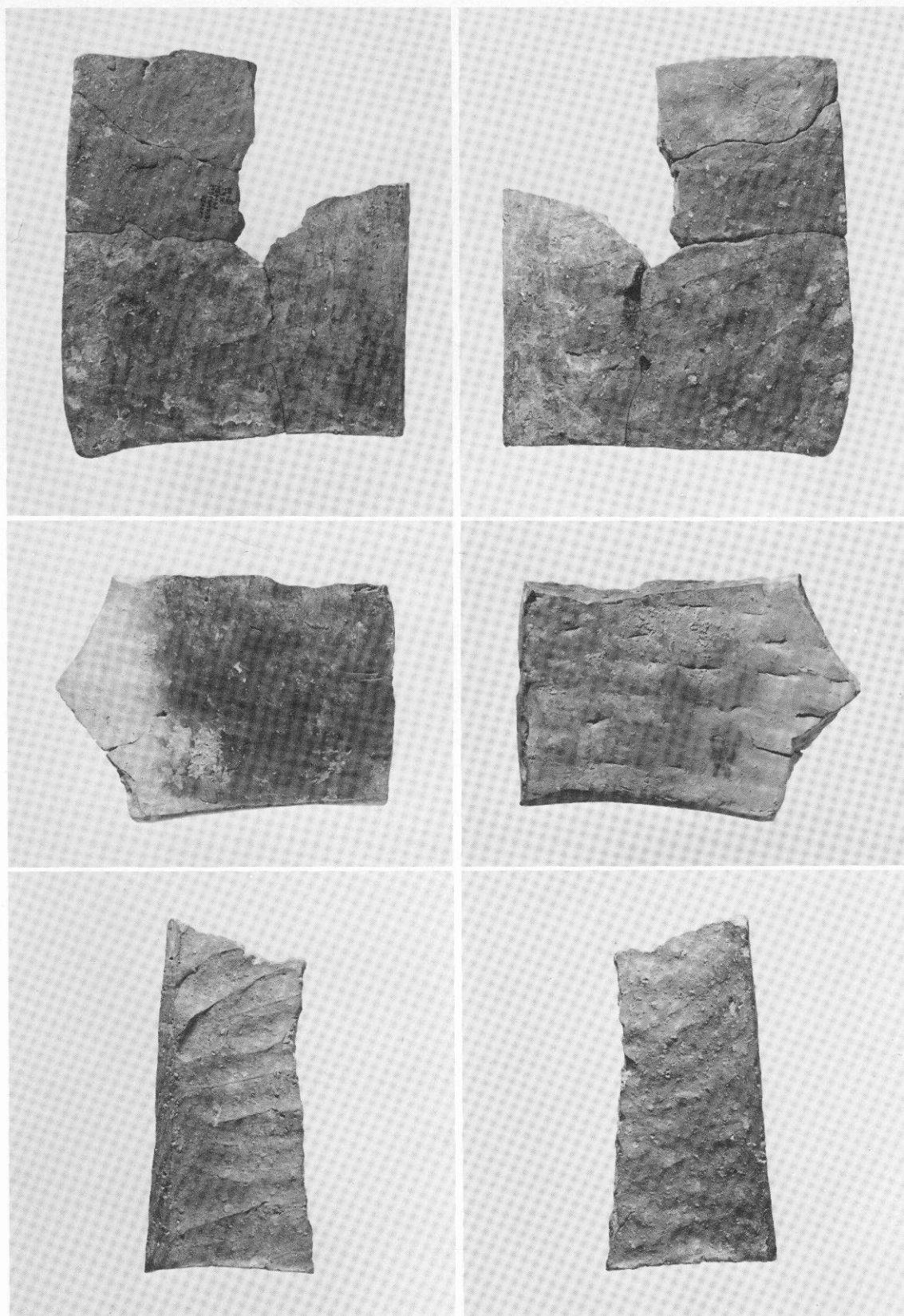




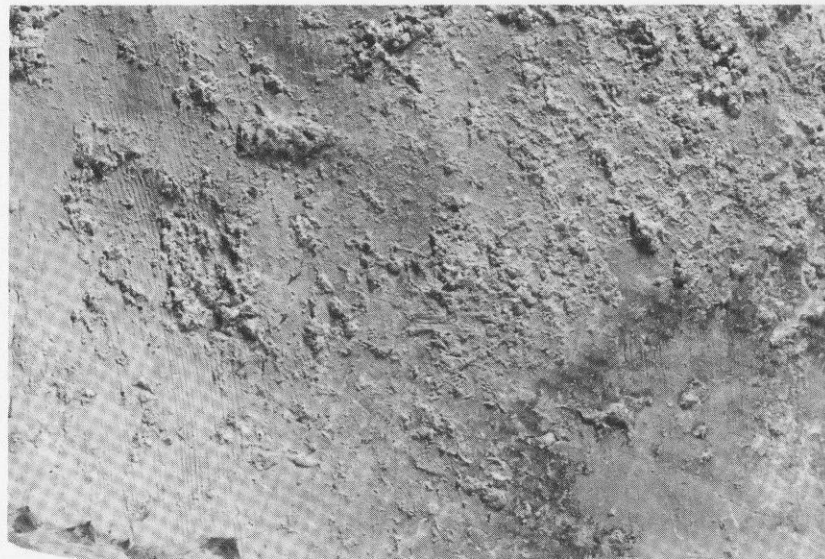
2号窯跡出土軒丸瓦



2号窯跡出土軒丸瓦 凹・凸・叩き目部分

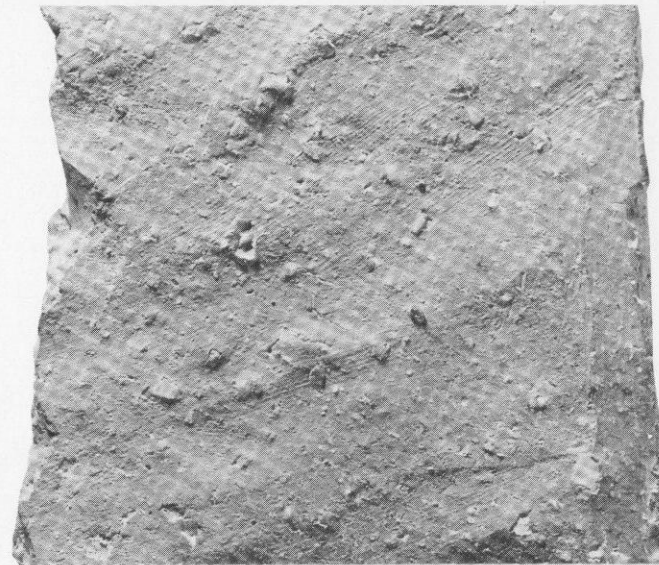


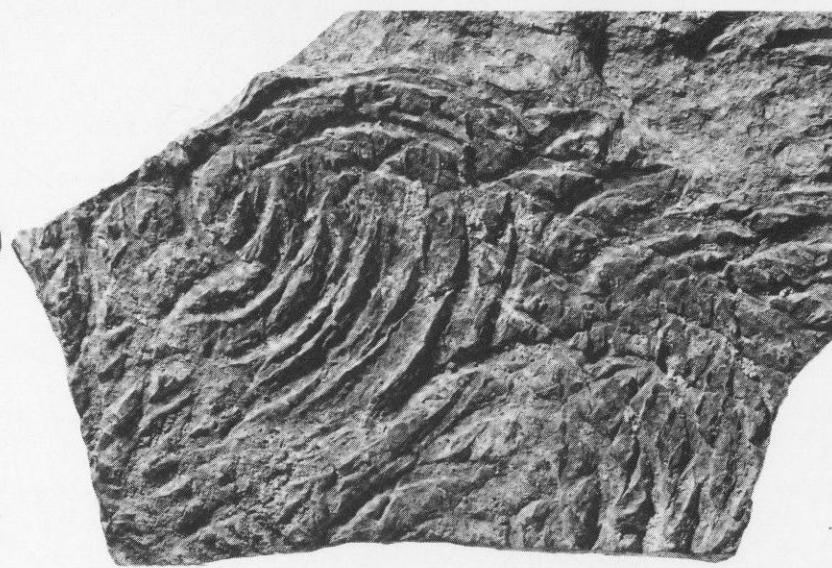
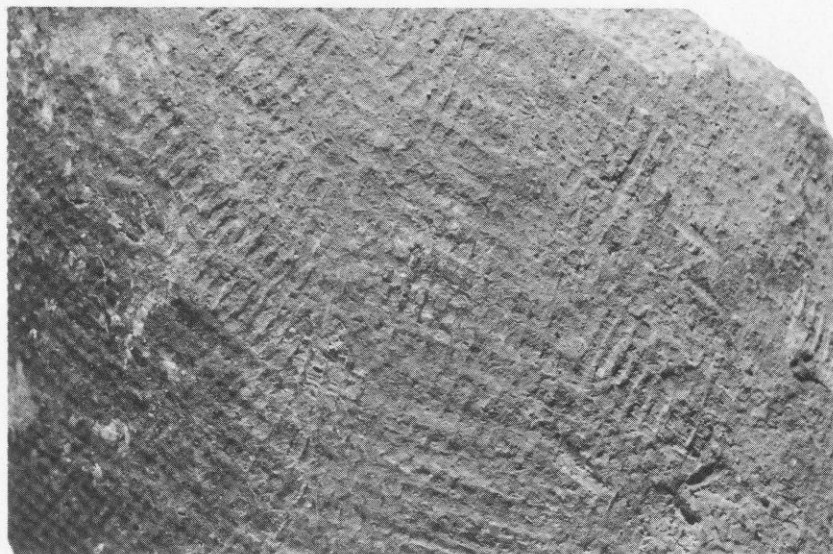
2 号窑迹出土平瓦



(上) 粘土紐痕跡と
ナデおよびハケ目
調整 (平瓦)

(下) ナデおよび
ヘラケズリ調整
(平瓦)





(上) 丸瓦 (下) 須恵器甕の凸凹面の叩きおよびナデ調整

神ノ前窯跡

太宰府町文化財調査報告書 第2集

昭和54年3月31日

発行 太宰府町教育委員会
福岡県筑紫郡太宰府町大字観世音寺

印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号